

「子どものために祈ろう」

柏原教会 西本 耕一



夜、初更に起きて叫べ。主の前にあなたの心を水のように注ぎ出せ。町のかどで、飢えて息も絶えようとする幼な子の命のために、主にむかって両手をあげよ。

哀歌2・19

昨年十一月韓国で開かれた「シエマ教育セミナー」に出席する機会が与えられました。シエマとは、申命記6・4にある「聞け」というヘブル語です。

セミナーでまず驚いたことは、韓国の実情です。韓国は言わずと知れたIT文化先進国です。会場は山の中にありましたが、ロビーではパソコンが何台か置いてあり、インターネットが無料で使える状態でした。それは家庭でも同じです。パソコン・ゲームの影響は、子どもたちに深刻な状況を与えています。攻撃的なコミュニケーションゲームが脳に影響を与えて、それが校内暴力・いじめ、家庭内暴力に至らせて

いるのです。クリスチャンホームですら、例外ではありません。子どもがゲームで部屋に閉じこもり、ついには家族にさえ手をかける尊属殺人が起こっているのです。

この状況を憂えた果川約守教会ソル・ドンジュ牧師は「シエマ教育」を考案され、教会に取り入れられたのです。その教育はユダヤ人が家庭で子どもたちにみ言葉を教える方法が元になっています。親がまずみ言葉に取り組み、そして子どもたちに質問し、み言葉をもって対話するのです。それによって家庭は子どもたちとの会話が弾み、明るくなり、家族関係が回復され豊かになったのです。シエマ教育の実演では、親と子どもたちが心を開き、会話をしている姿が輝いて見えました。

更には教会も変わり、祖父母と孫、三世代礼拝が行われています。子どもたちが神の恵みの中で礼節を重んじ、親を敬い、目上の人を尊ぶ姿があるのです。

この日本はどうでしょうか。韓国と同じです。子どもたちは、この世の危険にさらされているのです。私たちは手をこまねいていて良いのでしょうか。まず、祈りましょう。神様は必ず家庭を、そして教会を主の豊かな恵みに回復してくださいます。

牧羊者

目次

巻頭言	1
目次	2
カリキュラム	3
カリキュラム解説	4
教師養成講座「あなたの子ども、あなたが教えてください」 —韓国シエマ教育セミナー報告—	5
受難・復活	11
旧約①「創造・墮落」	29
キリストの教え	71
牧羊ひろば（待望教会）	89
「牧羊者」のご購読・ご利用について	92
おわりに	92

〔凡例〕

1. 原語について：ギリシャ語は〔ギ〕、ヘブル語は〔ヘ〕、アラム語は〔ア〕で表記しています。
2. 礼拝メッセージ例の最後の「さんび」の略記について
こ：「こどもさんびか」、こ改：「こどもさんびか改訂版」（以上、日本キリスト教
団出版局）、ホ：「教会学校・日曜学校 子どもさんびか」（日本ホーリネス教団出
版局）、イン：「教会学校さんびか」（インマヌエル教会学校部）、ふ：「ふくいん子
どもさんびか」、GS：「ふくいんこどもさんびか2 グローイング・ソング」（以
上、日本児童福音伝道協会）、PW：「プレイズワールド」（リビングプレイズ）



● 受難・復活

行事

テーマ

聖書

暗唱聖句

4月6日 進級式 世に勝つ者

ヨハネ 16・29～33

同 33 節

13日 棕櫚の日 十字架による新しい絆

ヨハネ 19・23～30

同 27 節

20日 イースター 復活の主との出会い

ヨハネ 20・11～18

同 15 節

● 旧約①創造・墮落

行事

テーマ

聖書

暗唱聖句

4月27日

天地創造

創世記 1・1～31

同 1 節

● キリストの教え

行事

テーマ

聖書

暗唱聖句

6月15日 父の日 天の父の愛

マタイ 5・43～48

同 45 節

22日 さいわいな人

マタイ 5・1～12

同 3 節

29日 地の塩・世の光

マタイ 5・13～16

同 14 節

8日 ベンテコステの花の日

御霊の実

ガラテヤ 5・16～26

同 22・23 節

6月1日

救いの約束

創世記 3・14～24

同 21 節

25日

罪の結果

創世記 3・6～19

ローマ 6・23 節

18日

罪のはじまり

創世記 3・15～17

同 2・17 節

11日

母の日 両親に従う

エペソ 6・1～4

同 1 節

5月4日

人間の創造

創世記 1・26～31

同 27 節

二〇二四年度カリキュラム解説

新しい三年カリキュラムが始まりました。既に前号『牧羊者』送付時にご案内していますように、今回のカリキュラムは、リソース活用カリキュラムとなっています。これまでの蓄積を生かしながら、現代の教会教育の働きのために用いられるカリキュラムとなるよう、祈りつつ作成させて頂きました。詳しくは、前回お送りした三年カリキュラムの説明文書をお読みください。

以下は、今年度カリキュラムについて、簡単にご説明致します。なお、今年度カリキュラムだけでなく、三年間分のカリキュラムも、教会教育室ホームページからダウンロードして頂けるように致します。適時ご利用ください。

①旧約聖書

旧約聖書からの学びは、三年かけてひと巡り学ぶようになっています。今年度はその最初として、「創造・墮落」「ノア・族長」「モーセ」「ヨシヤ」を学びます。特に創

世記からの学びは、基本的な部分が多く、リソース活用部分がなくなっています。子どもたちにはできるだけ新鮮な形で取り次いで頂ければ感謝です。

②新約聖書

新約聖書からは、毎年、キリストの生涯全体をひと通り学べる形にしています。四月はじめの「受難・復活」、父の日からの「キリストの教え」、九月のキリストのみわざ、年末の「クリスマス・年始」、年度末の「キリストの教え」「キリスト受難」と、年間行事や教会暦と絡みながらの単元構成となっています。

③テーマ「救い主なる神を知る」(マタイ1・21)

今年度のテーマとしては、「救い主なる神を知る」としました。「創造・墮落」、ノアの箱舟、「モーセ」、クリスマス単元のほか、キリストの教えの中にも、人間の罪の現実や、そこから救う神の恵みが繰り返し取り上げられる内容になっています。ぜひ、子どもたち一人ひとりが救い主なる神様にお出会いする一年でありますように。

「あなたの子ども、あなたが教えてください」

—韓国シエマ教育セミナー報告—

教会教育室長 中島啓一



イスラエルよ聞け。われわれの神、主は唯一の主である。あなたは心をつくし、精神をつくし、力をつくして、あなたの神、主を愛さなければならない。きょう、わたしがあなたに命じるこれらの言葉をあなたの心に留め、努めてこれをあなたの子らに教え、あなたが家に座している時も、道を歩く時も、寝る時も、起きる時も、これについて語らなければならない。またあなたはこれをあなたの手につけてしとし、あなたの目の間に置いて覚えとし、またあなたの家の入口の柱と、あなたの門とに書きしるさなければならない。

申命記6・4～9

昨年11月、韓国安城にあるサラン教会修養館を会場に、三泊四日の日程で「シエマ教育セミナー」が開催されました。シエマ教育とは、果川約守教会のソル・ドンジュ牧師が提唱する、教

会、そして家庭における信仰継承のための聖書教育論です。その中心は聖書のみ言葉であり、その主体は家庭です。今、韓国のキリスト教界でもこのシエマ教育は大いに注目を集めており、セミナーが年に2回のペースで開かれています。前回までのセミナーに、福岡教会の横田武幸先生や横田法路先生が参加され、このシエマ教育に深く感銘を受け、共感を持たれました。そして西本耕一信徒局長にシエマ教育を紹介して下さり、このたびのセミナーに、西本先生と私とで教団から参加させていただきました(横田武



ソル・ドンジュ師夫妻、通訳のキム・スンホ師と教団から参加した教師たち

幸師・千代子師夫妻、加藤順子師、三股愛子師も一緒に。回を重ねるごとに参加者も増えているようで、今回のセミナーには韓国内外から約400名の牧師や教会教育の担当者が集っていました。そのセミナーで受けた恵みのエッセンスを、牧羊者の誌面を借りてご紹介させていただきます。

一、シエマ教育とは

「シエマ」とは、冒頭に記した申命記の聖句の書き出し、「イスラエルよ聞け」における、「聞け」という命令のヘブル語です。ユダヤ人の家庭では、聖書を中心とした子育てがなされます。子どもは神から託されたものという責任感に基づく彼らの子育てと教育は、親と子の絆を強め、子の親に対する愛情と信頼を深め、教育的な成果のみならず、信仰の継承という豊かな実を結ぶのです。

ソル・ドンジュ牧師は、ユダヤの家庭で普通に行われているこの子育てと教育を、ユダヤ人だけでなくすべての家庭が実践すべき聖書の宣教命令と受けとめました。すなわち親から子へ、子から孫へと神の言葉を伝えなさいという、「垂直的宣教命令」としてです。シエマ教育は、しばしば誤解されるような、ユ

ダヤ人の教育法ではなく、「聖書の教育法」なのです。

初代教会から今日に至るまで、教会は、「全世界に出て行って、すべての造られたものに福音を宣べ伝えよ」(マルコ16・15)という「水平的宣教命令」を大切にし、それに従ってきました。しかし、それに比して、「イスラエルよ聞け」：努めてこれをあなたの子らに教え(よ)」という「垂直的宣教命令」はおろそかにされがちだったのではないのでしょうか。ソル・ドンジュ牧師は、そこにこそ、韓国における近年の教会成長の鈍化、家庭での信仰継承率の低下、さらに社会の道徳的腐敗の原因があると考えました。そして、垂直的宣教、すなわちこの申命記の命令に基づく信仰教育の中にこそ、教会と家庭、さらには社会の回復のために必要な鍵があると考えました。そして、この命令の核心をなす二つの柱、「聖書中心教育」と「親が子どもを教える」ことを中心に据えた「シエマ教育」を提唱し、自身の牧会する果川約守教会で実践したのです。すると、目を見張るような成果が各家庭に、そして教会に表れました。このシエマ教育はあくまでも「聖書の教育法」であって、個人や特定の団体に帰するものではないとの考えのもと、ソル・ドンジュ牧師は、諸教会とその理論やノウハウを分かち合うために、このようなセミナーを開催しておられます。

二、シエマ教育が必要とされる現代社会の实情

学歴が過度に重視される受験競争の社会の中で、子どもたちは小さい頃から競争に次ぐ競争でストレスにさらされています。残念ながら、クリスチャンの家庭においても、神を第一とすることではなく、この競争社会に勝ち抜くことが最重要のことと位置づけられてしまうことが多いのです。インターネットやテレビには好ましくない情報が氾濫し、暴力的な映像やゲームによって現実と仮想の区別がつかない子どもが増えています。結果として、校内暴力やいじめ、性の乱れ、青少年の自殺、さらには尊属殺人といった目を覆いたくなるような悲惨な状況になっているのです。

親が、一般の教育やしつけを学校に、そしてクリスチャン家庭であるならばそれに加えて信仰教育を教会学校に押しつけ、それらの責任を放棄してしまってきたことが、この現状をもたらしたのです。教育の一番の主体であるべき家庭が、その責任を果たさなかった結果、多くの家庭で親と子の会話が少なくなり、その大切な絆が弱体化してしまったのです。クリスチャン家庭がそんな状態では、信仰継承がうまく行かないだけでなく、

社会で起きていることと同じことが、その家庭においても起こり得るし、実際に起こっているのです。

聖書は、「聖書中心教育」と「親が子どもを教える」ことを命じています。利他的なこの世の価値観ではなく、揺らぐことのない聖書の価値観を、他の誰かではなく、親が子どもに教える、それがシエマ教育の中心理念です。このような聖書に基づく教育が、今こそ必要とされているのです。

三、シエマ教育の具体的内容

このシエマ教育を実践するに当たって、ソル・ドンジュ牧師は果川約守教会のスタッフたちと共に、祈りのうちにいくつものプログラムを綿密に用意しました。その中でも中心的な三つのプログラムを紹介したいと思います。それらは、「土曜シエマ」、「主日シエマ」、そして「三世代礼拝」です。

①土曜シエマ

親と子が揃って教会に集い、土曜日の午後に行うシエマを「土曜シエマ」と呼びます。この土曜シエマのテキストは、親用と子ども用が用意されており、親はテキストを事前に予習してき

ます。内容は、聖句暗唱、聖句に基づく質問、そして自由討論です。子どもが、み言葉をよく観察し、解釈することによって、自ら大切なメッセージに気づくようにとテキストは作られています。親が子を教えるといっても、それは一方的な教育ではなく、むしろ共に聖書から学ぶ、といったほうがふさわしいでしょう。聖書が何を教えているかを、上から教えるのではなく、子どもが自ら発見するように、テキストに基づいて親が導くのです。それを導く親自身が、聖書の権威を認め、それに従う姿を子どもに見せることが最大の教育です。初めのうちは戸惑いがちでぎこちなかった親子も、回を重ねるうちに質疑や討論がはじむようになります。そして土曜シエマの時間だけにとどまらず、会話が少なかった家庭においても会話が増えて、親子の絆が深まるという効果もあります。信仰教育とは、聖書だけを教えればよいということではありません。それは人格教育ですから、親と子の関係が良好となり、信頼関係がはぐくまれ、そこから生まれる



土曜シエマ実演の様子

安定した情緒があればこそ、信仰は確実に継承されていくのです。

②主日シエマ

しかしすべての家庭が、親子そろって土曜シエマに来られるわけではありません。家庭がクリスチャンホームでない子どもたちも大勢います。そんな子どもたちのために開かれるのが「主日シエマ」です。日曜日に子どもたちを集め、親に代わって、訓練を受けたCS教師が学びを導くのです。こちらにも専用のテキストが用意されています。土曜シエマの教える内容が生活に即した実践的な主題であるのに対し、主日シエマの内容は、創世記から黙示録に至る聖書の核心主題です。主日シエマの内容が実践的な主題でないのは、親と子という垂直的な関係の中でこそ、生活に即した主題が意味を持つということだと思えます。もちろんクリスチャンホームでない家庭の子どもたちに対する宣教も、教会の大切な使命ですから、主日シエマもまた重要な働きです。けれども、まず教会が取り組むべき順番は、親と子が揃って集う土曜シエマが先で、主日シエマはその次です。「土曜シエマではなく、主日シエマだけに取り組んでもよいですか」という質問に対し、ソル・ドンジュ牧師は、「どの教会でも、

必ず、まず土曜シエマから取り組んでください」と答えておられました。シエマ教育の精神が最も色濃く表れる場所は家庭であり、親と子の関係の中からです。

③三世代礼拝

果川約守教会がもう一つ大切にしている取り組み、それは毎月第一主日に行う三世代礼拝です。子どもたちが祖父母、両親と共に礼拝をささげることによって、世代間の壁が取り払われ、コミュニケーションが円滑となり、信仰が自然と継承されていくのです。

その背景には、これまでの教会のあり方に対する反省があります。すなわち、せっかく家族がそろって教会に来て、子どもたちはCSの礼拝に、親たちもそれぞれの奉仕場所へと分かれていき、午後になってやっと顔を合わせることが普通であったのです。それでは信仰の継承が難しいのは当たり前です。聖書を見ると、神は「アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神」と書かれています。神があえてこのように三代の神としてご自身を表されたということに鍵があるとソル・ドンジュ牧師は考えました。そして三世代が礼拝堂に集まって座り、共に礼拝をささげるようにしたのです。するとそこは垂直的な信仰

伝授の場所となりました。父母の信仰が子に受け継がれ、またある家庭においては、子と孫の信仰が祖父母に伝わるという祝福が与えられたのです。

ここにも水平的な宣教命令に加えて、垂直的な宣教命令にも忠実に従っていきましょうという姿勢が表れています。大切な事は、どちらか一方ではなく、両方大事だと言うことです。そしてその一つが今まで見落とされてきたことを反省し、そちらにも取り組むことが必要なのです。

四、シエマ教育の成果

シエマ教育は単なる教育の一プログラムではありません。その目的は、教会が聖書中心、み言葉中心の体質に変わることであり、教育について神が命じておられる親の役割を回復することです。

シエマ教育の特徴は、親と子が互いに質問と返答を繰り返す会話の時間です。これによって互いに理解も深まり、双方とも人格的に成長するのです。さらにプログラムの中には、親と子が互いの良い所を誉め合い、また改めてほしいことを伝え合う時間があります。改めてほしい点も、「〜がため」、「〜がいや」

と言うのではなく、「くしてくれろ」と私は嬉しい」という風にポジティブに伝えるのです。このことによって親子間の関心と理解が深まり、信頼の絆が強まるのです。

シエマ教育に参加した家庭は、親子共に悔い改めへと導かれ、神のみ言葉を正しく受け入れるようになるそうです。このように、シエマ教育とは、教会が、水平のものに加えて、もう一つの垂直の宣教命令を遂行していくために必要な手段であり、それによって、それぞれの家庭が回復され、各々の信仰が確かにされ、その信仰が継承されていくものなのです。

五、日本におけるシエマ教育の展望

韓国の現状は、また日本の現状でもあります。そしてシエマ教育はユダヤ人の教育ではなく、聖書の教育ですから、韓国だけでなく、日本の教会と家庭にとっても必要なものであり、かつ有効であると信じます。

シエマの関連書籍やテキストは韓国語で書かれていますが、ソル・ドンジュ牧師は、自由に日本語に翻訳し、存分に用いてくださいとおっしゃって下さいました。幸いなことに、私たちの教団にはたくさん韓国の先生方がおられます。その先生

方の協力により、主テキスト『あなたの子ども、あなたが教えてください』と、土曜シエマのテキストの日本語訳が進められています。春には翻訳が完了している予定ですので、おそらくPDFファイルという形で配布できるのではと考えています（希望者は教会教育室長・中島啓一までメールで問い合わせして下さい。chitachurch@dream.jp）。まずは、是非、ソル・ドンジュ牧師が書かれた主テキスト『あなたの子ども、あなたが教えてください』をお読みいただいて、シエマ教育の概要を知っていただきたいと思います。

日本イエス・キリスト教団でも、すでにいくつかの教会がシエマ教育のプログラムを始めるための準備を進めていると聞いています。このシエマ教育が日本の教会と家庭に根差し、それを通して、それぞれの家庭、教会、地域社会が祝福のうちに豊かに回復されるようにと祈る者です。



会場で代表祈禱をする西本耕一師

聖書 ヨハネ16・29～33 テーマ 世に勝つ者

序論

(石田高保)

今日の個所は、最後の晩餐の席で、イエス様が最後に語られた言葉で、残して行く弟子たちに、最も励ましとなった内容である。(わたしはすでに世に勝っている)とは、何を意味するのだろうか。世を征服してしまったとも訳せる。完了形で書かれているので、イエス様の取られた勝利が、現在までずっと続いている、効力がある、モノを言っている、21世紀の私たちにまで及んでいるということになる。「世」とは私たちを誘惑し、神から引き離す力のこと、人、もの、お金、地位、遊びごとなどを指す。「光はやみの中に輝いている。そして、やみはこれに勝たなかった」(1・5)。

〈あなたがたはこの世ではなやみがある〉、イエス様はクリスチャンの生活から悩みとなる出来事を取り去ることはされない。そのような周りの状況は変えられないかもしれないが、私たちの対応は変えることができるし、人間の側の責任でもある。

つまり悩みを悩みとしておくのではなく、それを平安に変える道がある。(これらのことをあなたがたに話したのは、わたしにあつて平安を得るためである)、イエス様が弟子たちになにばんとしようとしたものは、ご自身の平安であった。それをいただくためには、イエス様の勝利を自分の生き方に当てはめることである。たとえば野球のファンは、そのチームの勝ち負けと一体のところがある。相撲のファンは、ひいきの関取の勝ち負けと一体である。それとは次元が違うが、私たちは負け知らずのイエス様と分かちがたく一体になっている。だからイエス様の勝利は、私たちの勝利となり得る。

一、地上の生涯に勝利された

「主ご自身、試練を受けて苦しまれたからこそ、試練の中にある者たちを助けることができるのである」(ヘブル2・18)、イエス様は私たちの受ける試みも、痛みも、悲しみも体験してください。その中で罪に陥ることなく、悪魔の誘惑にも全戦全勝された。「だが、彼(この世の君)はわたしに対して、なんの力もない」(14・30)とあるとおり。誰か、私たちの代わりに人生を生きてくれる人がいるだろうか。そんな人はいない。しかし私たちのできなかった完全

な生き方を、イエス様は代わりにやり抜いてくださった。わたしの人生を踏み直してくださった。地上の生涯に勝利してください。あなたのどんな過去がイエス様によって踏み直されているか、具体的に黙想してみてはどうだろうか。

二、十字架において勝利された

ほとんどの人にとって死ぬことは生涯の終わりではなく、それが人生の完成とか勝利であるということは考えにくい。しかしイエス様は死ぬことによって、その生涯を完成された。十字架に掛かって「すべてが終った」と言われたが、これは「完了した、成就した、完成した」という意味である。私たちの罪の贖い^{あがな}、つまり救いがあの十字架上で完成している。イエス様は人類をことごとく死に追いやるどころの罪を、十字架に掛かることによって贖ってくださった。このことを一度でも受け入れるならば、これまで犯してきた罪はまったく帳消しとなり、後悔に悩まされることはなくなる。だから十字架の死において罪に勝利された。主の十字架によって赦^{ゆる}されない罪も拭い去られない罪もないのである。

三、復活によって勝利された

イエス様が十字架に死んで墓に葬られ、三日目に復活さ

れた時、何が起こったのか。人類共通の敵である死を打ち破り、これに勝利してくださったのだ。「死は勝利にのまれてしまった、…死よ、おまえのとげは、どこにあるのか」(1コリント15・55)、イエス様は復活によって死の恐怖というとげを抜いてしまわれた。クリスチャンにとって死ぬことは敗北ではなく、地上の生涯の完成であり、天国への花道でさえある。イエス様と共に迎える死は、まさに勝利である。

結論

「すべて神から生れた者は、世に勝つからである。そして、私たちの信仰こそ、世に勝たしめた勝利の力である。世に勝つ者はだれか。イエスを神の子と信じる者ではないか」(1ヨハネ5・4・5)、イエス様の勝利は、そのまま私たちの勝利だから、たとえ世に負けているように見える状況でも、私たちは主にあつて勝利者なのである。短期的には負けているようであつても、主により頼む人は長期的には世に勝つのである。イエス様の勝利は、私たちの勝利である。「主よ、あなたの勝利は、わたしの勝利です！」と宣言しよう。死にも勝利しているイエス様を、人生の主としてより頼み続けよう。

研究資料

(小平徳行)

この箇所は「告別説教」の結びである。この説教では特にイエスの死と復活について語られており、これは神の救いのご計画における最も重要な時といえる。この贖^{あがな}いのわざこそ、すべてを新しくするものであり、イエスはそれを先取りして勝利を宣言されたのである。

テキスト

29〜30 今、あからさまにお話しになって この時弟子たちは、イエスが25節で言われた言葉を用いて、今はイエスが語られていることは、はっきり理解できると言った。理解が進んだことは事実であるが、これは彼らの理解がまだ不完全であることを示すものであった。比喩^(ギ)パロイミア 元来「ことわざ」「深い意味をたたえている知恵の言葉」という意味である。新約聖書では4回だけ用いられている(他にはヨハネ10・6、16・25、Ⅱペテロ2・22)。イエスの言葉は聞く人にとっては理解できない謎であった。わたしたちはあなたが神からこられたかたであると信じます ここに弟子たちの信仰告白がなされている。彼らは、イエスが霊的洞察力をもつ

ており、自分たちの心の中を見通しておられることに感銘し(16・19)、そのような超自然的洞察力ゆえに、イエスが神からこられたお方であると信じたのであろう。彼らは自分たちが適切な信仰告白をしていると思つてゐるが実はそうではなかった。イエスが神から遣わされてこられたかたであることは信じているが、イエスがこの世を去れることについては触れていない。弟子たちはイエスが神の栄光を表わすためには、イエスが死んでこの世を去ることが必要であることは、まだ理解できなかったのである。弟子たちは自分たちが理解していないことが分からないほど、少ししか理解していなかった。「あからさまに」なるには「時」がある。それはイエスの復活、昇天によって、彼らに真理の御霊が与えられ、神との愛の交わりに導かれる時である。その時、もはや謎としてではなく明白な真理として理解できるようになる(16・12〜15)。

31〜32 ここでイエスは有頂天になっている弟子たちを戒め、その信仰の不完全さを指摘している。それは間もなく直面する試練に揺るがされてしまう弱さをもった信仰であった。あなたがたは今信じているのか これは一

つは、イエスが神から遣わされたお方であることを「今」やつと信じるのか、ということであり、もう一つは、これから起こることに關しては「今」もう信じているのか、という二重の意味を持つ。あなたがたは散らされて、それぞれ自分の家に帰り、わたしをひとりだけ残す時が来るであろう。イエスはご自分の逮捕、処刑に際して、弟子たちがご自分を見捨ててであろうことを予告された。これはイエスの死に対する弟子たちの認識、理解が欠如している事を際立たせるものであった。迫害は信仰の試金石である。しかし、イエスはゲッセマネの園でご自分を捕縛しに來た者たちに対し、弟子たちを去らせるように命じておられる。イエスは弟子たちの弱さを知った上で、細やかな配慮をもって最後まで愛し通された(13・1)。しかし、わたしはひとりではない。父がわたしと一緒におられるのである。イエスの受難は御父が共におられるという確信によって支えられていた。それだけに、十字架において御父の愛から見放されたことは、どれほど耐えがたい苦しみであったらうか。しかし最後には平安のうちにご自身の霊を御手にゆだねられた(ルカ23・46)。

33 わたしにあって平安を得るためである 平安こそイエスが与える決定的な賜物である。それはこの世が与えるものとは違う(14・27)。イエスとの關係によつて弟子たちは、やがて迫害に直面する時でさえ平安であることが可能となる(16・2参照)。あなたがたは、この世ではなやみがある。ここでイエスは、弟子たちがこの世にある限り、苦難に直面する事は避けられないことを予告している。なやみ(ギ)スリシス 「苦難」の意味であるが、これは産みの苦しみに他ならない(16・21)。つまり後には必ずこの苦しみから解放され、それを忘れさせる喜びが待っているのである。しかし、勇気を出しなさい。わたしはすでに世に勝っている イエスは目前に迫る受難と死を前にして、それが御父のご計画の成就であることを確信して、既に勝ち取られたものとして勝利を宣言している。勇気を出すことができるのは勝利の確信があるからである。平安の根柢はイエスの勝利にある。こうしてイエスの告別説教は勝利の宣言で結ばれる。

参考図書 村瀬俊夫「ヨハネの福音書」『新聖書註解・新約1』(いのちのことば社)、「ヨハネ伝講義下」高橋三郎(待晨堂) 他。

聖書

タイトル

暗唱聖句

目標

ヨハネ16・29～33
イエス様によって、勇気百倍！

あなたがたは、この世ではなやみがある。しかし、勇気を出しなさい。わたしはすでに世に勝っている。ヨハネ16・33
キリストにあつて、世の困難を乗り越える勇気を持つ。

導入

(和田 治)

「やったあー！ ついに優勝したあー！」ずっと大ファインで応援してきたプロ野球チームが、初めて優勝したことが、勝君は自分の事のように嬉しくて大はしゃぎでした！皆さんには、応援している野球チームやサッカーチーム、あるいは、おすもうさんや運動選手などがありますか？そのチームや選手が勝てば、もう、自分自身の勝利と同じくらい喜びが爆発しますよね！今日は、すでに世に勝っておられるイエス様の勝利は、私たちに本当の勝利を与えてくれるんだ！ってことを学びますよ！

最後の晩餐の席で

「あなたがたは心を騒がせてはなりません。神を信じな

さい、そして私を信じるのですよ」。イエス様は恐れている弟子たちにおっしゃいました。いよいよイエス様が十字架にかかる前の晩、最後のお食事の席でのことでした。イエス様のお話が締めくくられようとするとき、力強くこう言われたのです。「あなたがたは、この世ではなやみがある。しかし、勇気を出しなさい。わたしはすでに世に勝っている！」ちよつと待って！イエス様は、これからご自分に起ころうとしている恐ろしいできごとを、全部前もって知っておられたのですよ。なのに、こんなに勇気に満ち溢れておられるなんて、すごい！では、このお言葉にはどんな意味があつたのでしょうか？

悩みがあつても大丈夫

イエス様は弟子たちに、「私を信じていれば、もうこの世で悩みなど一つもなくなります」とはおっしゃいました。むしろ「この世では悩みがある」とはつきりおっしゃったのですね。続いて「しかし、勇気を出しなさい！」って励ましてくださいました。イエス様は、どんなことがあつても揺るぐことが無い、イエス様ご自身の「平安」を、信じる私たちに下さるのです！「わたしはあなたがたに、わたしの平安を与えよう。それはこの世が与え

る、はかない平安とは比べものになりません。だから、どんな時にも恐れなくて良いのですよ」と！ どうしてイエス様は私たちに平安をお与えになることが出来るのでしょうか。それは、イエス様ご自身が、十字架で、ものすごく大きな苦しみを通られたからです。こんな言葉があります。「主ご自身、試練を受けて苦しまれたからこそ、試練の中にある者たちを助けることができるのである」。そうです！ イエス様なら、私たちがどんなに痛く、寂しく、悲しく、みじめで、死にたいくらいに辛くても、その苦しみをお分かり下さって、必ず助けて下さいます！ そのことを知ってイエス様に頼るなら、勇気百倍！ 悩みがあっても絶対に大丈夫なんですよ！

「わたしはすでに世に勝っている」

イエス様がおっしゃる「世」ってなんでしょう。私たちを誘惑して、神様から引き離す力のことです。ある人にとっては「ゲーム」かもしれないし、またある人にとっては「お金」かもしれない。もしかすると、「やめなきゃな」と思っているけれども、どうしてもやめられないってこと、ありませんか？ イエス様は「わたしはすでに世に勝っている」っておっしゃいましたね。だから、イエス様を信じ

ている私たちは、世に勝つことが出来るのですよ！ み言葉の通り、心から信じましょう！

「十字架と復活」による勝利

イエス様は十字架の上で「すべてが終わった」とおっしゃいました。私たちの罪の罰を、イエス様が全部引き受けて下さったということです。イエス様を信じるなら、どんな罪でも全く帳消しにしていただけののです。十字架で死なれたイエス様は三日目に復活されました。死にさえも勝利されたのですから、その勝利は完全です！

まとめ

友だちにいやなことをされたり、悪いことに誘われたり、時には先生や家族からさえ、辛い仕打ちを受けるかもしれません。そんな時、イエス様に「助けて！」って祈ろう！ 「勇気を出しなさい」とおっしゃるイエス様が、本当に勇気をくださいますよ！ そして、皆さんの中に、これまで「世」の力に負けてしまっていたなうって気づかされた人がいるかもしれません。その人は今、お祈りしませんか？ 罪を悔い改め、これからは勝利できるように…。イエス様がそうしてください！

♪主のパワー♪ (GS 36)

聖書 ヨハネ19・23〜30 テーマ 十字架による新しい絆

序論

(石田高保)

十字架の周りには様々な立場の人がいた。祭司長たちのような反対者、兵卒たちのような無関心な人、女性の弟子たちのような主を愛する人。主はそれぞれの人々に深い関心と愛を向けておられ、最後の一息まで人を愛することをやめなかった。

一、無関心な人々

イエス様はクリスマスに地上に降る前、天においてはどのような状態でいらしたか。それは神の子として父なる神と一体となり、人類の歴史を導いておられた。神の栄光がイエス様を包み、無数の天使たちが仕えていた。全知全能のイエス様が、人間となるとき、神の子として持っていた至高の位も豊かさも敢えて捨てて、丸裸で生まれてくださった。では地上の生涯を終えるときはどうであったか。(23、24)にあるように、僅かな所有物であった着る物でさえ、みな剥ぎ取られてしまった。「主は富んでおられたのに、あなたがたのために貧しくなられた。それは、

あなたがたが、彼の貧しさによって富む者になるためである」(Ⅱコリント8・9)、私たちを霊的に富む者とするため、永遠の命を与えるために、主は敢えて貧しい者、自分の命を捨てる者になって下さった。

イエス様を十字架につけた兵卒たちは、何に関心を向けているだろうか。イエスご自身であろうか。兵卒たちはイエス様の着ていた物にしか関心がなかった。あることかイエス様の下着で賭け事をしていた。何と浅ましい姿ではないか。人類の歴史において、人間の救いにおいて最も重大な出来事であったにもかかわらず、そして最も近くにいるにもかかわらず、イエス様に目を向けるどころか、この世のことに夢中になっていた。これはまたイエス様を信じる前の私たちの姿でもある。救いはすぐ近くにあるのに、人々は知らないだけなのである。無関心なのは、本当のことを知らないだけなのである。何とかして身近な人から始めてイエス様のことを知らせたい。そんな彼らのことも主は無関心ではなく、「父よ、彼らをおゆるしください。彼らは何をしているのか、わからずにいるのです」(ルカ23・34)と祈られた。主が息を引き取られたとき、彼らの隊長だけは「まことに、この人は神の子であった」(マルコ15・39)

と言つて、イエス様の本当の姿を悟っている。主は無関心な人々のことも諦めずに祈り、愛し続けられた。

二、主を愛する人々

十字架のそばにいたのは兵卒たちだけでなく、弟子たちの姿もあった。ここには少なくとも5人の名前が挙がっている。そのうち4人が女性で、男性は「愛弟子」と書かれたヨハネで、十二弟子のうちイエス様の側にいたのは彼ひとりだけだった。死刑が行われている所に近づく、どんな目に遭わされるかわからなかったが、彼らはイエス様のそばに居ないではいられなかった。主は十字架に釘付けになって激しい痛みを苦しんでおられたにもかかわらず、そばに居る母マリヤをいたわり、言われた。「婦人よ、ごらんなさい。これはあなたの子です」、お母さんに向かって「婦人よ」と呼びかけるのは違和感があるが、イエス様は救い主という特別な使命に生きていたために、えこひいきすることなく、親子の情を聖別しておられたのである。けれども残してゆく母の身の振り方をちゃんと考えておられた。弟子のヨハネに向かって、「ごらんなさい。これはあなたの母です」、こう言つてイエス様は弟子のヨハネに母の老後を託した。

これはいったい何を意味するのだろうか。一つはイエス様がやもめの年老いたお母さんの面倒を弟子に任せることによって、子どもとしての責任を果たしたと言える。「あなたの父と母とを敬え」という十戒を最期の時にも実行された。もう一つはヨハネと母マリヤが親子になることによって、神の家族が始まったと言える。ヨハネはマリヤを自分の家に引きとつて、自分の母として仕えることになった。主は信仰による家族を創造した。イエス様がヨハネと母マリヤを取り持つて、新しい家族を始められた。教会というところもまさに同じで「神の家族」である。

結論

「ごらんなさい、ここにわたしの母、わたしの兄弟がいる。神のみこころを行う者はだれでも、わたしの兄弟、また姉妹、また母なのである」(マルコ3:38-39)。イエス様を家族や教会、小グループに迎える時、そこに神の家族が創造される。実際の家族であれば、再創造されると言ってもよい。しかも神の家族は永遠に続く。この新しい絆をあたためて行こう。

研究資料

(小平徳行)

十字架の場面である。本福音書では「十字架上の七言」の第三、五、六言が記録されている。今回のテーマは特に第三言に関わることであるが、他の所も取り上げ、本福音書独特の十字架の場면을味わいたい。

テキスト

23〜24 兵卒たちは：上着をとって四つに分け 当時の習慣として、処刑に当たった兵士たちは、特別の報酬として囚人の着物を取ることが許されていた。本福音書では上着と下着を区別して説明している。上着は縫い目に沿って四等分し、下着は縫い目のない一枚織りであり、裂いてしまうと役に立たなくなるためくじ引きにされた。聖書が成就するため 兵士たちがこのように着物を分け、くじ引きにしたのは、自分たちの意思を越えた神のご計画であった。彼らは自覚せずに預言を成就した（詩篇22・18）。この出来事はイエスの十字架に対するこの世の無関心、無感覚を象徴している。

25 イエスの十字架のそばには 兵士たちとは対照的にイエスの十字架のかたわらには敬虔な女性たちが立って

いた。本福音書では遠くの方（マタイ27・55）ではなく近くにたたずんでいた女性たちの姿が描かれている。母の姉妹 この女性が誰であるかは知られていないが、他の福音書と照らし合わせると、マルコでは「サロメ」（16・1）、マタイでは「ゼベダイの子らの母」（27・56）と呼んでいる女性であることが考えられる。クロバの妻マリヤ この女性も知られていないが、彼女たちはイエスがガリラヤにおられた時から、いつもイエスにつき従っていた（マルコ15・41）。

26〜27 愛弟子 ヨハネのこと。イエスの十字架に男の弟子が立ち会ったことは本福音書にのみ記されている。婦人よ、ごらんなさい。これはあなたの子です イエスは十字架の苦しみの中でも、母マリヤを思いやり、弟子に託し、子としての分をつくした。イエスには弟たちがいたが、まだイエスを信じておらず、イエスの行動に好意的ではなかった。またこの時、彼らはエルサレムには来ておらず、わが子の十字架刑を見て必死で耐えている母マリヤを支える者が必要だった。まさにマリヤはシメオンの言葉のごとく剣で胸を刺し貫かれるような心境であった（ルカ2・35）。これは単なる家族愛を示した出来

事ではなく、重要な真理を象徴するものである。イエスの十字架によるみわざは、贖^{あがな}われた者の新しい交わりを創造するものであった。それはキリストにある神の家族としての交わりである。

28 わたしは、かわく ヨハネはこの言葉に旧約の預言の成就を見出した(詩篇22・15)。これは肉体的な渇きとともに、霊的な渇きでもあった。神との交わりが全く断たれてしまったゆえに、絶え入るばかりに神を慕い求める声であった(詩篇42・2、63・1等)。私たちはキリストの贖いゆえに、いつまでも渇くことのない恵みにあずかることができる(ヨハネ4・14、6・35)。

29 イエスにぶどう酒を差し出したことに関してはマルコによる福音書では二つの記述がある。すなわち刑場に着的した時に差し出された没薬を混ぜたぶどう酒(15・23)と十字架上のイエスに差し出された酔いぶどう酒(15・36)である。前者は当時死刑囚に与えていた麻酔薬と考えられ、後者はラテン語で「ボスカ」と呼ばれ、ぶどう酒から作った酢を水で薄めた兵士たちの飲み物であった。前者は十字架刑の苦痛を軽減することが目的であったが、イエスは飲むことを拒まれた(15・23)。本書では

この後者について述べている。これは渇きをいやすためではなく、むしろ渇きを激しくするものであり、ここに兵士たちの残酷さが表れている。これも預言の成就と言える(詩篇69・21)。ヒソブ これは茎を束にしてユダヤ人がきよめの儀式のために用いた(レビ14・4・7、詩篇51・7、ヘブル9・19)。これを十字架の処刑場でローマの兵士が手にしていたのは不思議である。しかしイエスがまことの過越の小羊として、ほふられる時にヒソブが用いられたことは、出エジプトの過越の時に小羊の血を入口の門の柱に塗り付けるために、これが用いられたことを連想させる(出エジプト12・22)。

30 すべてが終った(ギ)テテレスタイ 「完了した」の意。これは息を引き取る最後の瞬間がきたという断末魔の叫びではなく、旧約の預言を成就して贖いを成し遂げた勝利の叫びである。息をひきとられた 直訳すると「霊を去らせる」となり、この死がイエスの意志に基づく自発的なものであったことを示唆している。新改訳では「霊をお渡しになった」。

参考図書 4月6日分の他、山下正雄「ヨハネの福音書」『実用聖書註解』(いのちのことば社)

聖書

ヨハネ19・23～30

タイトル

十字架による新しい絆

暗唱聖句

ごらんなさい。これはあなたの母です。

ヨハネ19・27

目 標

神との関係、人との関係を変える十字架の力を知る。

導入

(和 田 治)

皆さんは「絆」という言葉を知っていますか？ 人と人との、離れることができない結びつき、つながりのことです。二〇一一年、東日本大震災の年、「今年の漢字」に選ばれました…。とても大きく深い悲しみ、痛みの中で、人と人が支え合い助け合う「絆」はどんなに大切で大きな力でしょうか。神様は私たち人間を、互いの絆で結ばれ、愛し合うものとしてお造り下さいました。また、神様との愛の絆も最初は結ばれていたのです。

けれども、これまでの人間の歴史を振り返ると分かるように、せっかく神様がお与え下さった絆を、人間の罪が台無しにしてきました。でも大丈夫！ だってイエス様が、私たち同士の絆も、神様との絆も新しく造り変えて下さっ

たんですから！ ではどうやって？

十字架での出来事

「ハアアッ、ハアアッ…」 十字架にかけられたイエス様の、あまりにも苦しそうな息遣い…。時々「ううぐぐぐ…」とうめき声が聞こえます。もう、そばにいただけで耐えられなくなりそう…。十字架刑が行われている所にその囚人の仲間が近づくと、捕まえられてひどい目にあわされるかもしれません。ああ、危ない、近寄っちゃダメ！ ところが、イエス様のそばに居ないではいられない数人の人がいたのですね…。イエス様はそのうちの一人、お母さんのマリヤをじつとご覧になりました。我が子がこんなひどい目に遭っている…。母親として耐えられない苦しみです！ イエス様は十字架に釘付けになつてもものすごく激しい痛みに苦しんでおられたのに、マリヤにおっしゃったのです。「婦人よ、ごらんなさい。これはあなたの子です」。ええ？ お母さんに向かって「婦人よ」なんて、ちょっと変つてると思いませんか？ でもね、イエス様はマリヤの息子であると同時に、「みんなの救い主」です。ですから、えこひいきすることなく、ほかのみんなもマリヤと同じくらいに愛されたのです。そうですね。そうです、決して冷たい言葉

ではなく、心から母マリヤを思っている言葉だったのです。だから、弟子のヨハネに、「ごらんなさい。これはあなたの母です」とおっしゃって、イエス様は母マリヤをお託しになられたのです。

神の家族が始まった！

実は、イエス様が二人にこうおっしゃったのには深い意味があるんです。ヨハネと母マリヤが親子になることによつて、「神の家族」が始まったんです！ え？ 「かみのかぞく」？ そうなんです。イエス様はここで、「イエス様を信じる信仰によつて結びついた家族」を造り出して下さったのです！ イエス様がヨハネと母マリヤの間に深く新しい「信仰による絆」を造って下さったんですね。その絆で結ばれているのが「神の家族」なんです！

私たちも神の家族！

ですからね、みなさん、私たちの「教会」もまさに「神の家族」なんです！ 皆さんのことを、弟や妹、息子や娘、そして、孫のように、心から愛し、大切に思つて祈つていて下さる神の家族が、みんなにはいっぱいいるんですよ！ 同じ教会の仲間だけではありません。日本中、いや、世界の全てのクリスチャンが、神の家族なのです。イエス様

が命を懸けて愛の絆で結んで下さった神の家族です。神の家族はみんな、一人残らず父なる神様としつかりと堅い絆で結ばれています。まるで、縦糸と横糸がしつかりと組み合わせられて頑丈な生地が出来上がるように、神様との絆、仲間との絆があるのです。やったく！ 神の家族って素晴らしいですね！

例話

治くんはお母さんのお腹の中にいるときから教会に通っていました。3歳の時にお父さんが亡くなりました。ちよつぱり寂しいこともあったけど、教会が二つ目のお家みたいな気持ちで過ごしてきました。やがて知ったのです。牧師先生が本当のお父さんのように祈りながら接してしてくれたこと、教会のみんなが家族のような気持ちで大切に思つてくれたこと。治くんは、神様に、そして神の家族である皆に、心から感謝しました！

まとめ

イエス様がせっかく「絆」を新しくして下さったのですから、神様と深く交わりましょう！ そして神の家族のお互いも、祈り合つて心を開いて交わりましょう。

♪神の家族♪ (PW 87)

聖書 ヨハネ20・11～18 テーマ 復活の主との出会い

序論

(高橋頼男)

十字架に愛するお方の死を確認し、そのなきがらがヨセフの墓に納められるのを見届けたマグダラのマリヤは、安息日が明ける日の朝、まだ暗いうちから墓に急ぎました。墓に着くと墓は空っぽでした。空虚な墓の外で泣いているマリヤに復活の主イエスが現れ「マリヤよ」と呼びかけられました。マリヤは振り返って主を認めると、悲しみに押しつぶされていた心に喜びが爆発し「ラボニ」と叫んで主にすがりつくとうとしました。復活の記事は喜びにあふれています。甦よみがえられた生ける主にお出会いするならだれでも喜びに溢れます。キリストのご復活は、悲しみを喜びに絶望を希望へと一気に転換する出来事です。

一、悲しみの涙と悲嘆(11～15)

復活の朝、墓に急いでいたマグダラのマリヤは、ひたすらイエス様のなきがらを求めていました。なんとしてもイエス様のお体に触れ、自分の手で心を込めて葬りの備えをしたかったのです。それは、愛するお方を失った痛手を癒いやす

すためのグリーフ(深い悲しみを受容するための心の過程)であつたかもしれません。ご遺体を目の前にして、お別れのための時間が欲しいと切に願いました。もし復活が無かつたとしたら、愛する者の死は過酷です。私たちはありつたけの涙を流し、その悲しみに身も心も任せて悲嘆に暮れるほかありません。この時、マリヤは生きておられる方を死人の中に求め、復活された主を空虚な墓に見出そうとしていたのです。主は甦よみがえられたのです、主は生きておられます。そして、マリヤのかたわらに立たれます。しかし、絶望に打ちひしがれた心、悲しみの涙に曇ったマリヤの目には、甦よみがえって生きておられる主、マリヤのそばに立たれる主を認めることが出来ませんでした。私たちもひどい悲しみや痛み、苦しみの中に全く見捨てられた者のように感じるときがあるかもしれません。しかし、私たちは見捨てられず、主は生きておられます。

二、悲しみを喜びに変える復活の

キリストとの出会い(16～17)

主は再びマリヤに呼びかけてくださいました。「マリヤよ」と懐かしい声でいつものように呼びかけてくださいました。この時マリヤはじめて反応しました。主イエスと

の親しい交わりを持つていましたから、そのやさしい御声を聞き分けることができました。振り向くと、そこに甦って生きておられる主がおられました。マリヤは喜びのあまり「ラボニ」と叫んで主にすがりつこうとしました。マリヤは今、甦って生きておられる主を拝して、全く変えられてしまいました。これまでの主イエスとの交わりが、復活の主の呼びかけに応答することを可能にし、生ける主との新たな親しい人格的な出会いと交わりに導いたのです。キリスト復活の事実が目が開かれ、生ける主との出会いが導かれるなら、人の心と生き方は一変します。すべての事情と状況が直ちに変わってしまうのです。不信と絶望、落胆の中にあったあの弟子たちを変えたのも、四〇日間、彼らが復活の主に繰り返し何度もお出会いし、彼らが、主が生きておられることをもはや疑うことが出来ない者とされたからです。主のご復活は、彼らに起死回生の転機をもたせ、その後の彼らの生き方を変えました。さらに、ペンテコステのご聖霊は、甦りの主が内に生きておられることを鮮明にさせました。主は生きておられる、わがうちにおられる。その時、内に命が溢れだし、信仰の躍動を感じ、生きる勇氣と力が湧いてきます。この主を仰ぎ、崇め、

賛美し、生活のあらゆる場面で歌い続けましょう。

三、喜びの源である復活のキリストを伝える

(17、18)

主が復活され、生きておられることを知ったマリヤは、もうじつとしていることが出来ません。抑えがたい喜びと興奮の中に駆け出して行きました。一刻も早く、仲間に出会いたい、出来事を伝えるためです。同時に、マリヤにはまだどこかに恐れがあったかもしれません。甦られた主にお会いしたことが現実のように思われず、何か夢を見ているように感じるところがあったかもしれません。しかし、〈彼らに伝えなさい〉と復活の主が言われたお言葉は、はっきりと耳に響いていました。そのお言葉に従い、〈弟子たちのところに行つて、自分が主に会ったこと、またイエスがこれこれのことを自分に仰せになったことを、報告した〉のです。

結論

生きておられる主との出会いを通し、喜びに溢れて復活のキリストを宣べ伝えるものとならせて頂きましょう。

研究資料

(中島啓一)

テキスト

11 マリヤは墓の外に立って泣いていた。その涙は、イエスの死そのものの悲しみ(11・31参照)に加え、その遺体が無くなった(「奪われた」と思っていた)ことによる悲しみのゆえであった。時代や地域を問わないことだが、ユダヤの文化でも遺体に対する無法(蹂躪^{じゅうりゃん}など)は御法度^{ごはつと}であり(サムエル上31章参照)、通常、墓荒らしでさえ遺体そのものには手をつけなかったと言われる。

12 白い衣を着たふたりの御使。白い衣は天的な存在であることの象徴であると共に、服喪の色である黒との好対照を示し、復活を象徴するものと言える。

13 だれかが、わたしの主を取り去りました…。遺体が盗まれたと思ひ込み、よみがえりの発想が全くなかったマリヤは、天使を見ても、悲しみから解放されなかった。

14 ふり向くと、そこにイエスが立っておられるのを見た。しかし、それがイエスであることに気がつかなかった。エマオ途上の弟子たちは「愚かで心のにぶい」(ルカ24・25)ため、イエスだとすぐには気づけなかった。マリヤの目を

曇らせたのも、涙だけではなさそう。

15 園の番人だと思つて。墓が園の中にあつた(19・41)ことが勘違いの理由だろうが、園の番人であっても、墓を開けて遺体を移すなどあり得ないことである。けれどもマリヤは藁^{わら}にもすぎる思いで、もしあなたが、あのかたを移したのでしたら…。と言つたのであろう。

16 マリヤよ。それが主イエスだとマリヤが気づく瞬間は、人格的な呼びかけによつてもたらされた。15節では一般的な「女よ」という呼びかけであつたが、今ここで、イエスは「良き羊飼ひ」としてご自身の羊を名前で呼ばれたのである(10・3)。マリヤはふり返つて「羊はその(＝羊飼ひの)声を知っている」(10・4)。ヨハネが強調するのは、復活の主との個人的、人格的な関係性である。マリヤはすでに一度ふり向いていたはずである(14)。だが、その時はそれがイエスだと気づかず、おそらく視線を戻していた。それが今、自分の名を呼ぶ懐かしい声で我に返り、再びふり返つたのであろう。ラボニ。ヘブル語とあるが実際はアラム語(両者は親しん戚せきのような関係)で「先生」の意。一般的な「ラビ」よりも大きな尊敬を込めた呼び方だという説と、対照的により親しみを込めた呼び方だ

という説もある。いずれにせよ重要なことは、マリヤがこれまでいつも、イエスに対しこのように呼びかけていたであろうと言うことである。

17 わたしにさわってはいけない これはイエスがトマスに触ってみよと促されること(27)と矛盾するようにも思えるがそうではない。^[ギ]ハプトーは「触る」の他に「しがみつく、くつつく」の意もあり、新改訳、新共同訳は「すがりついてはいけません」などと訳しているが、その方がよりふさわしいだろう。マリヤはイエスを「離さなければならぬ」ということである。それは、**わたしは、まだ父のみもとに上っていない** からである。この「上って」は完了形であり、後の「みもとへ上って行く」が現在形であることと合わせ、イエスが今、昇天の途上にあることを示す。復活のイエスは地上にとどまり続けるのではなく、やがて(すぐに)天に昇られる。そうすれば今までのように肉眼で見、手で触れることはできなくなる。しかしイエスがかつて言われたように、それは彼らに「益」(16・7)をもたらすのである。**わたしの兄弟たち** なぜ弟子たちがイエスの兄弟であり得るのが続いて示される。**わたしの父またあなたがたの父…わたしの神またあなたがたの神** 父なる

神との関係において、イエスのそれ(三位一体における永遠の交わり)は、弟子たちのそれとは区別される。けれどもこの区別は「排斥」ではない。その正反対の「包含」がここにはある。すなわち御子のおかげで弟子たちは、本来ならそうは呼べないお方を「わが父、わが神」と呼ぶことができる者とされたのである。「主は、彼らを兄弟と呼ぶことを恥とされない」(ヘブル2・11)。そこに圧倒的な愛とゆるしがある。ルツ1・16「あなたの民はわたしの民、あなたの神はわたしの神です」を想起するかもしれない。ナオミとルツの間に新しい家族関係が結ばれたように、主が兄弟姉妹と呼んでくださる者同士も、新しく兄弟姉妹とされ、ここに教会という新しい家族が誕生する。ルツ記においては、ナオミの神のもとへ来ることを選んだのはルツであつたのに対し、ここでは救い主の方から私たちの所へ来てくださり、その生涯と死、復活と昇天という一連の救いのわざを通して、私たちを神の民としてくださったのである。

参考図書 注解書 Beasley-Murray (Word), Lindars (NCB) 他。その他 The IVP Bible Background Commentary: NT.

聖書

ヨハネ20・11～18

タイトル

復活の主との出会い

暗唱聖句

女よ、なぜ泣いているのか。だれを捜しているのか。
ヨハネ20・15

目標

悲しみの涙を取り除く、復活のキリストに出会う。

導入

(水野晶子)

イースターおめでとうございます。イースターって、とってもうれしい日です。喜びの日です。だって、私たちのために死んでくださったイエス様が、よみがえられた日だからです。

でも、そのことを知らなかった人がいました。

泣いているマリヤ

イエス様は、十字架にかかって完全に死なれました。金曜日のうちに十字架から下ろして、その体を布で巻き、たくさん香料を入れてお墓に納めました。大きな石がお墓の入口におかれ、誰も入ることができませんでした。日曜日の朝まだ暗いうちに、マグダラのマリヤさんがお墓に行くと、石が取り除けられてあり、お墓の中は空っ

ぽでした。白い衣を着た二人の天使が墓の中にいました。イエス様はいなかったのです。誰かがイエス様を盗んでいったのだと思ひ込み、悲しくて悲しくて泣いてしまいました。イエス様が死んでしまったことで、絶望していたのに、遺体までなくなつて、もうどうしたらいいかわからなくて泣き続けたのです。すると、天使が「女よ、なぜ泣いているのか」と言いました。マリヤさんは悲しみでいっぱいになり、「だれかが、私の主を取っていかれたのです」と答えました。ところが、イエス様はすぐそばにおられたのです。そして、「女よ、なぜ泣いているのか。だれを捜しているのか」と尋ねられました。

復活のキリストに出会った喜び

涙で曇つたマリヤさんの目には、よみがえつて生きておられるイエス様が墓の管理人のように思えました。それで、「ここにおられた方を、どこかに移したのですから教えて下さい。私が引き取ります」と訴えました。すると、「マリヤよ」となつかしい声が聞こえてきたのです。振り返つてみると、イエス様がそこにおられるではありませんか。その時初めて、マリヤさんはよみがえられたイエス様に気づいたので。『ラボニ(先生)』と今まで

親しみを込めて呼んでいたようにまた、お呼びすることができて、うれしくてすがりつこうとしました。生きておられる主に出会ったマリヤさんの心に、大きな喜びがわきあがってきました。

イエス様は罪と死に打ち勝って、よみがえられたのです。このイエス様を信じ、今も生きておられるイエス様を心の中にお迎えするとき、私たちの心の中に喜びや希望があふれ、生きていく勇氣と力がみなぎってきます。

復活のキリストを伝える喜び

よみがえられたイエス様に出会ったマリヤさんは、イエス様が生きておられることと、イエス様が伝えるように言われたことを、すぐ弟子たちに伝えに行きました。伝えることによって、喜びがもっと大きくなりました。

涙が喜びに変わった人

九歳の時に、お母さんが病気で死んでしまったA子さんは、毎日泣いてばかりいました。学校から帰ってくると、お母さんはいないと分かっている、部屋や台所、トイレ、お風呂や物置まで捜しました。心の中はさびしくて、何をしてもむなしく感じていました。ある日、夢でお母さんが、白い着物を着て、うれしそうに天国に昇っ

ていくのを見ました。その時、幼稚園の時に聞いたイエス様のことを思い出し、教会に行けばお母さんに会えるかもしれないと思い、教会学校に通い始めました。その頃、A子さんは「人間なんて、死んでしまえばおしまいだ」と、とってもむなしく思っていたのです。ところが、イエス様がA子さんのために、罪を背負って、十字架にかかって死んでくださり、よみがえって今も生きていることを聞きました。このイエス様を信じるなら、神の子どもとされ、永遠の命が与えられ、天国に入れてもらえることを知って、イエス様を救い主と信じました。その時から、泣き虫だったA子さんは、心から笑い、喜びがあふれ、希望が与えられました。やがて、このイエス様の復活の恵みを伝えたいと思い、牧師さんになったのです。

まとめ

イースターの今日、生きておられるイエス様に出会い、心のうちにお迎えし、いつも喜んで、よみがえられたイエス様を伝えていきましょう。

♪キリストは生きておられる♪（新聖歌257、PW49）

聖書 創世記1・1～31 テーマ 天地創造の神

序論

(金井信生)

聖書は、「神がいるかないか」についてではなく、「神がこの世界を造られたから、わたしはここにいます」ことに気づかせ、どこに心と生活の基盤を置くことが良いことなのかを教えてください。

一、「はじめ」がある

真理を求めて聖書を学ぼうとする人、悩みを抱えて飛び込んでくる人、あるいは何の気なしに開く人と、聖書を開くきっかけはさまざまです。しかし、まず目に飛び込んでくるのは、「はじめに神」という言葉です。

私たちが何かをしたり、考えたりできるのも、はじめに神がこの世界を造られたからです。人間のあれこれに先立って、そしてそれをはるかに超えて神の御業の中にすべてが治められている宣言がここにあります。

また、「光あれ」の言葉に続いて天地創造の御業が進められます。私たちが目にする世界のすべてのものに始ま

りがあり、またそこには神の関与がありました。すべて造られたものに神の目が行き届いているのです。

そして、「始められた」と聞くと、「では終わりは？」との関心呼び起こします。もちろん、終わりはまだ先のことです。「はじめ」と「おわり」がしっかり定められることが、人生全体にも日々の歩みにもよりどころとなります。神が始められたのだから、神がどのように結末へと導かれるのか、読み進める中に大きな期待がわいてきます。

二、目的と秩序のある世界

神が命じられると、「そのようになった」と、繰り返されながら、創造の御業が進められていきます。「科学」は「どのようにしてできたのか」、「何からできているのか」などを探求します。しかし、聖書は「だれが造ったのか」、「なぜ造ったのか」を教えてください。

私たちが生きている中でも、どうしてこうなったのかと原因を追究することもあります。かえって問題がややこしくなることもあります。また、過ぎ去ったことについて手出しの出来ないこともあります。その中で、神

の定めた秩序の中に生かされていることを認めることが大事です。

神の手の中にすべてが治められていることを信じ、すべてのことに意味があり、目的があることを知る方が、前向きに生きることができます。

神は造られたものそれぞれに置かれるべき場所を与えられました。また、〈種類にしたがって〉造られました。では、わたしたち〈人〉はどこに住むように造られており、どんな種類として造られているのでしょうか。

この課題は次週にくわしく取り上げますが、科学をはじめとする人間の知恵だけでは得られない答えを、聖書は示しています。

三、神の目になう世界

へはなはだ良かった、これが、造られた世界に対する神の評価です。自然界を調べていくと、動物でも植物でも鉱物でも、その時は役割がわからなくても、調べていくうちに無用のものはひとつもないことが明らかになってきます。

それに対して人間の作る物は、芸術作品ではほめる人

もあればけなす人もいます。工業製品では、便利だというので一斉に使われたものが、しばらくすると環境破壊になったりしています。人間お互いもそれぞれ良いとする基準が違い、争っています。人間も含めてへはなはだ良かったはずの世界は、どこにいつてしまったのでしょうか。

人間によって乱され、汚されてしまった世界に、神も心を痛めておられます。人間なら失敗作として投げ出しても仕方がない状態ですが、神はどこまでもご自分の作品を愛し通し、関わりをもたれます。愛によって、さらに良いものになろうとされます。それが続いて記されていく聖書の歴史であり、神の救いのご計画です。

結論

神によってこの世界も私も造られ、それぞれの役割と使命の中で生かされていることを喜び、天地創造の神を信じましょう。

研究資料

(井上義実)

創世記はヘブル語での原題は冒頭の言葉である「**ヘ**ベ
レーシス」である。七十人訳ギリシャ語聖書では「**ゲ**ネ
シス」と訳され、英訳では「ジェネシス」である。

テキスト

1~2 **神は天と地とを創造された 創造された**(**ヘ**バー
ラー) ヘブル語には他にも創造と訳される単語はあるが、
バーラーは神による創造以外に用いられない。人の手による
造作とは全く次元が異なり、無から有を生み出す神の業
であることを表わす。創造はただ、神の絶対的な意思によ
るものであり、人がうかがい知るものではない。全宇宙の
事物は神の被造物であるので、天地は神ではない。自然界
のあらゆる生物も神ではない。神は創造された、とあるが、
第一格の父なる神だけではなく、三位一体の神が創造に関
与されている。ヨハネ1・3には「すべてのものは、これ
によつてできた」と記されており、イエスが創造の指導的
な立場であることを示唆している。**神の霊が：おおつてい**
た 聖霊がすべて関わったのである。はじめに とある
が、神の創造の業がなされた時に、時が刻まれ始めたので

ある。創造は物質の始まりであり、時間の始まりでもある。

3 **神は「光あれ」と言われた** 神は創造のすべてを言葉
によつて命じられ、その業をなされた。神の言葉がどれほ
ど力あるものかを知る。光はエネルギーを持ち、やみを追
いやるものである。**第一日**(**ヘ**)ヨーム・シャード) 日を
表わすヨームという名詞と序数の一を表わすシャードが組
み合わされている。この一日を24時間と見るか、さらに長
い期間と見るのかという論議があり、単純に現在の一日と
は言い切れない。ヨームは旧約聖書に多用され、訳語は50
以上に及ぶ。時代、永遠などの意も含まれる。全能の神に
よる創造であるから、期間の長短を定めようとすることは
あまり意味のない論議であらう。

7 **おおぞらの下の水とおおぞらの上の水**：地球は水の
惑星である。大気は気体だけではなく水の粒子でできた雲
を持ち、水は空と地上(海や川)とを循環している。

9 **かわいた地が現れよ** 地上はすべて水で覆われていた
が、陸と海が区分された。今までは無生物であつたが、生
命を持つ生き物が生まれた。植物は光合成を行い、食物連
鎖の基礎となり、他の生物の食物となる。

11 **種類にしたがつて** 神は種類という区分を造られた。

近年は生命科学が発達し、遺伝子操作も可能になった。人間の営利、独善によって神の秩序、神の領域を乱してはならない。

14 天のおおぞらに光があつて 神は精密な天体の運行を定められた。一日、一週間、一月、季節、一年という秩序正しい期間を設けられた。神は人間に、日を数えることを教えられている。

20 水は生き物の群れて満ち、鳥は地上、天のおおぞらを飛べ 神は初めて動く生き物を形づくられた。最初に造られた動物は、水中の魚類や哺乳類はにゅうりゅう、空中の鳥類である。地上の動物の創造は、その後になる。

22 神はこれらを祝福して言われた 神の祝福は特に旧約においては、繁栄と結びついている。動物においては子孫が多く与えられることである。

24 家畜と、這うものと、地の獣とを種類にしたがつていだせ 地上の人間以外の生き物が造られた。家畜、爬虫類はちゅうりゅう、その他の動物という分類である。彼らの間に争いはなく、支配するものはまだ現れていなかった。

26 われわれのかたちに、われわれにかたどつて人を造り… 治めさせよう 創造の最終段階であり、最高の被造物と

して、神にかたどつて人間が造られた。かたどるとは外面的な形の引き写しではない。神と交わることでできる霊的な存在こそが、神のかたちを引き写す証である。人間もまた被造物であるので神ではない。しかしながら、神との類似性を持つものとして人間は形づくられた。他の動物にはない、自分は何者なのかという自意識を持ち、人格性を備えている。自分の行動に責任が伴う自由を持ち、道徳性が備えられている。他の被造物の支配を可能にする理性と、知性を兼ね備えている。人間は神から与えられた良い賜物を生かして、神に地上の統治を委託された至高の存在である。

31 神が造つたすべての物を見られたところ、それは、はなはだ良かつた 神は六日間と記された区分の中で創造の業を完成された。今までの創造の過程は良しとされたのである。創造の完成に至つて、神は満足をなさつた。人間が自由を誤つて用い、神に反逆するまでは、現在では想像できない平和と秩序が地に満ちていたのである。

参考図書 G. Ch. Alders (Bible Student's Commentary) 他

聖書

創世記1・1-31

タイトル

すごいっ！ 神様が全てを造られたんだ！

暗唱聖句

はじめに神は天と地とを創造された。

創世記1・1

目標

天地創造の神を信じる。

導入

(和田 治)

「この世界はどうやってできたんだろう?」「どうして僕はここにいるのかな?」「なぜ私は生きてるのかしら?」…そんなふうを考えてみたこと、ありますか? とつても大切な疑問ですね! 聖書は、「神様がこの世界を造られたから、私たちはここで生きている」って教えているんです! 私たちが食べたり飲んだり、遊んだり勉強したり、何かを考えたり感じたりできるのも、神様がこの世界を造られたからなんです。私たちがこうして、この世界を造られた神様を知り、そのお方を礼拝できているって、実はものすごく素晴らしい事なんですよ!

はじめに神は…

皆さんは何かを作るのは好きですか? 何かを作るとき、

必ず「材料」が必要ですよ。ところが、「はじめに神は天と地とを創造された」、つまり、神様は何もないところにこの世界を造られたのです! これは、私たち人間が何かを材料にしてものを作るということとは全然違います。神様にしかできないことです、何もないところに何かを生み出すっていうことは! では、どうやって?

天と地を創造された

「光よ、輝け」と神様が命じました。すると光がさつと輝いたのです。それを見て、神様はとても満足な様子、光とやみとを区別しました。昼と夜ができて、一日目は終わりました。次に、「水は上下に分かれ、空と海になれ」と、神様が命じました。そのとおり水が二つに分かれ、空ができました。二日目も終わりました。「空の下の水は集まって海となり、かわいた地が現われよ」。こう神様が命じると、そのとおりになり、「陸と海」ができました。陸に草木が生えるようお命じになると、そのとおりになり、神様は心から満足な様子でした。こうして三日目が終わりました。

「空に光が輝き、地を照らしなさい。その光で、昼と夜、季節の変化、一日や一年の区切りをつけるのです」。そのとおりになりました。太陽と月ができたのです。他にも、無数の星

が造られました。四日目は終わります。神様はまた命じました。「海は魚やその他の生き物であふれ、空はあらゆる種類の鳥でいっぱいになれ」。そのとおりになりました。五日目が終わりました。次に神様は命じました。「地は、家畜や獣など、あらゆる種類の動物を生み出せ」。そのとおりになりました。そして最後に、神様はこうおっしゃったのです。「さあ、人間を造ろう。地と空と海のあらゆる生き物を支配させるために」。人間が、天地を造られた神様に似た者として造られたのです。このように、六日間ですべてを造られた神様は、それらをごらんになって大変満足されました。すべてが「かんぺき!」、本当に素晴らしかったのです!

気付きましたか? 神様はすべてをその「お言葉」によって造られたこと…。ものすごいですよ、ね、神様のお言葉の力って! この神様のお言葉である「聖書」に従うなら、私たちの歩みも本当に素晴らしいものになるのは、当然ですよ、ね!

新島襄の回心

同志社大学というキリスト教主義の大学が京都にあります。この学校を始めたのは新島襄という人でした。彼は聖書の創世記一章を読んで、大変なショックを受けたのです。新

島襄の自伝には次のように書かれています。(一部、分かりやすい言葉に変えています。)

「私たちが生きているこの世界は、神の見えない御手によって創造されたのであって、単に偶然できたのではないことを私は知った。聖書から私は神の別の名が『天父』であることを知って、神に対するさらに大きな尊敬の気持ちがいってきた。私を創ったのは誰か? 私の両親か? そうではない、それは神だ。私の机を作ったのは誰か? 大工か? そうではない、それも私の神だ。神が地上に木をはえるようになさったのだ。神が大工に私の机を作らせられたのだ…。ならば私は神に感謝し、神を信じ、神に対して心の正しい人になりたい」。創世記を通して真の神に出会った彼は、何としても聖書を人々に伝えたい! と、聖書を土台とした大学を作ったのです。

まとめ

世界のすべてを造られた神様が、あなたをも造られ、愛し、すべてのことに関わってくださいます。だから安心して神様を心から信頼して行こう!

♪はじめに神が♪(GS6)

聖書 創世記1・26～31

テーマ 神のかたちに造られた人間

序論

(金井信生)

神は人間を造り、天地創造の御業の最後を飾られました。人間はどのような存在であるのか、そして何をするときに神に祝福された歩みができるのか、それが創造の言葉の中に初めから記されています。

一、神のかたち

神は造られたものそれぞれに、あるべきところ、住むべきところを定められ、「種類にしたがって」造られました。最後に造られた人は、世界のすべてを知り、治める存在として、また、ただ一つ〈神のかたち〉に造られました。

〈神のかたち〉とは、神が人間と同じような外観を持っているということではありません。むしろ人間は、神に似た存在として霊を持ち、善悪を意識し、互いに交わりを求めることにおいて、他の生物とは異なるものに造られたということです。

人は、目に見える世界だけの生き物ではありません。永遠や死を意識し、親しい者の死を悼み、自らの終わりを思い、また永遠者を慕い求めます。また目に見えていなかったものを形作っていく芸術性や創造力は神からの賜物です。そして、互いに交わりを持つことによって成長し、満たされていきます。

神との交わりと共に、人との交わりも必要です。創造の言葉においては、〈われわれのかたちに、われわれにかたどって〉とあるように、「互いの交わり」において神に似ることが強く示されています。

親子の関係は、神からの命の流れの中で、だれもが生まれたときから持つ間柄です。友情は、惹(ひ)かれあう部分もあり、選択的な部分もあります。さらに、神に似ることを最も学ばなければならないのは、夫婦の関係においてです。

二、男と女とに創造された

〈男と女とに創造された〉。これは、男と女が、どちらが後先ではなく、共に神に造られたものであり、区別して造られたことを教えています。

生まれた時から身近に父親母親の存在があり、それぞれの役割を感じていきます。また成長すると性別の違いを意識し始めます。男女の違いを差別的に見るのではなく、それぞれに使命があること、また、それが神からのものとして受け止めるときに、神の導きの中での役割分担があり、助け合いがあることを知ります。

神が『男』と『女』を造られた」のではなく、『男と女』と『造られた』とあります。固定化した『男』と『女』ではなく、一人一人の男性性と女性性、あるいは個々のパートナーの間での役割分担は、それぞれに違いがあり、幅の広さが初めから許容されていることを考えさせられます。

三、生めよ、ふえよ、地を従わせよ

他の生物は、その特徴によって住む地域が定まっていますが、人間だけは知恵を用いて、まわりの環境を自分たちの手で整え、世界中に広がりました。神がそのような造り、命じられたからです。

最近では、人類がどこまで増えるのか、飢餓や貧困の問題が危惧きぐされています。しかし、偏らず無駄にせずに分

配すれば、食料は十分にあるという試算もあります。また医療の発達と教育の普及によって、人口増加が落ち着くとの見方もあります。性急に聖書の言葉を批判せずに、人間の使命の基礎にある神の愛を学ぼうが良いでしょう。

神の与えた知恵は、人が互いに争うためではなく、それぞれの地を治めるため、すべての生き物を治めるためです。人の知恵と力は、猛獣や巨大な生物さえも支配したり、滅ぼすことができます。しかし、滅びそうな生き物を守ることもできます。身勝手にではなく、共に神に造られたものとしての愛をもって、自然界に対して、お互いにおいても、正しく治めていく知恵をみ言葉を通して学び、実行していかなければならないのです。

結論

神に向き合い、導かれながら生きるのが人間本来の生き方です。そして一人一人に与えられた役割を果たすために、神は使命を与え、豊かな結実を生むために、愛を与えておられるのです。

研究資料

(井上義実)

先週は創世記1章全体から天地創造のすべてを見たが、今週は人間の創造にしばらく、詳しく取り上げる。人間は古来、「自分は何者であるか」という問いを持ち続けてきた。このことはまた、人間が神によって造られた特別な存在であることを表している。人間とは何かという問いの答には、歴史、立場を通して、様々な考え方が満ちている。デカルトやカントは人間の理性を強調した。ヘーゲルは人間の意志を重要視した。シュライエルマッハーは、人間は情操、感覚の存在であるとした。それぞれに真理を言い当てており、間違っているではないが、部分的な各論である。聖書を基盤に持ち、神を中心に置くことによって、総体的な人間理解を持つことができる。創世記の人間の創造の記事は、人間とは何かを知る大きなかぎである。人間本来の目的、使命を知ることができる。

テキスト

26 われわれのかたちに、われわれにかたどって人を造りかたち (ヘツェレム) 「神のかたち」につくられたことこそが、人間性の根底にある。先週も記したよう

に、「かたどる」とは外面的な形の引き写しではない。宗教改革者のルターやカルヴァンは、神のかたちとは自由意志であると言った。人間は自由な意志によってものごとを決断することができる。これが神のかたちであると言っている。ある神学者は、神のかたちとは人間が神と関係を持つことができることであり、命ある愛の関係を持つことにあると言っている。他の神学者は、神のかちとは霊なる神が語りかけたときに霊の目が開かれている人が応えることができること、つまり人間の神との応答性に神のかたちがある、と言う。前者の神学者も後者の神学者も、神との人格的な交わりを持つことに神のかちがあるということを語っている。治めさせよう (ヘラーダー) 治めるためには、知性に基づいて、組織、計画、評価する能力が問われる。善い真実な感情に基づいて、治めるものの幸いを願い、それを阻むものを退けることである。人間は、神の心を地上に具現していくことに力を尽くさなければならない。人間に与えられた権威を振りかざして、治めるものを従属させることではない。人間が自然や生物に対してとる態度、姿勢は、このような基盤に基づかなければならない。自然の破壊、

生物種の絶滅などは神のみ心に明らかに反する。人間は思い上がり、謙虚に神の御心を果たすことが、始めからの使命とされている。

27 男と女に創造された 他のある神学者は、男と女に造られたことに神のかたちがあると云っている。伴侶は互いに、愛の交わり、命のやりとり、犠牲を負いあつていく関わりを持つものである。伴侶との間で真実な交わりを形造るようにと、神は人間に性別を与えられている。三位一体の神は、父、子、聖霊の間に愛の交わりを持たれている。人間もまた選ばれた男女の間にある交わりによって、神のかたちを持ちうるものとされている。

28 神は彼らを祝福して言われた 祝福（ヘバラク）
先週も記したように、神の祝福は特に旧約においては、繁栄と結びついている。動物においては子孫が多く与えられることである。被造物の冠である人間にこそ、神は祝福を与えられた。動物は神の祝福に対して意志的には応えられない。しかし、人間は神の祝福を認め、感謝し、応答することができるのである。選ばれた伴侶との結婚という正しい方法を通して、人間は子孫に祝福を伝えていくものとなる。アブラハムの場合、仕え女ハガルとの

間に生まれたイシマエルは祝福を受け継げなかった。妻サラとの間に生まれたイサクこそ、祝福の約束の成就となったのである。神の祝福のもう一つの側面は、他の被造物を従わせ、治めることであつた。それは神によって委託された権威であり、人間もまた神に従うものである。

29 あなたがたに与える 神が人間に与えられた食物は、穀物と木の実であつた。続く30節には、動物や鳥類の食べ物は青草とされたとある。人間が、植物以外の生き物を食べても良いとされるのは、ノアの洪水後になる（9・3）。創造の時点では、動物たちは互いに挑みあう弱肉強食の関係にはない。現在の生物界の秩序とは異なり、それぞれの食習慣も違っていたようである。そこには、穏やかで安らかな平和があつた。

31 神が造ったすべての物を見られたところ、それは、はなはだ良かつた 神は六日間と記された区分の中で創造の業を完成された。今までの創造の過程では「良しとされた」とある。しかし、創造の完成に至っては「はなはだ良かつた」と、神は最高の満足をなさつたのである。

参考図書 4月27日分の他、小林和夫『栄光の富Ⅰ』（日本ホーリネス教団）

聖書

創世記1・26～31

タイトル

えっ？ 神さまの「かたち」に？

暗唱聖句

神は自分のかたちに人を創造された。

創世記1・27

目標

神と共に歩むよう造られた者であること
を知り、神との交わりに生きる。

導入

(和田 治)

皆さん、先週のみ言葉を覚えていきますよね？ いっしょに言ってみましょう。「はじめに神は天と地とを創造された」。一番初めにできたのは？ そうです、「光あれ」と命じられて、光ができました。じゃあ、最後に造られたのは？ そうです、人間でしたよね。今日は、私たち人間がどうして造られたのか、聖書から学びましょう！

神のかたちに創造された

「神は自分のかたちに人を創造された」ってどういうことでしょうか？ 実は、神様の「かたち」って、外の顔かたちのことじゃないんです。人間の「なかみ」が、神様に似せて造られたってことなんです。ええ？ うっそー！ びっくり！ ですよね、私たちのなかみが神様に似せて造られたなんて、

すごーい！ 例えば私たちは、人に親切にすることや決められた正しいルールを守ることが「善いこと」だってわかりますよね。人に意地悪をしたり、うそをついたりすることが悪いことだともわかります。それは人間が、きよく正しい愛の神様に似せて造られたからなのです。また、みんなは今朝、「ふん！ 教会学校になんて絶対に行くもんか！」って決めたのに、勝手に足が動いてここに来ちゃったって人はいませんよね。人間は、「こうしたい！」「ああしたくない！」「と自由に自分で考え、やりたいことを選べるように造られたのです。ある人は「うちの犬には何が良いことか分かるんだよ！」と言います。でも、その犬は何をしようと叱られるか、何をするとほめられるかがわかるだけです。良いことと悪いことが分かったのではありません。イルカさんなど、どんなに賢い動物でも、例えば、素敵な音楽を奏でたり、美しい絵を描いたりではできませんよね。そんな力も、神様に似せて造られた人間だけに与えられているんです。良かった、そんな人間に造られて！

互いに交わり神様と交わる人間

では、皆さんは、神様から与えられた自由を、どんなふうに使っているかな？ 私たち人間だけが、神様に祈り、神様を

5月

4日 礼拝メッセージ例

礼拝し、神様を愛して生きる自由があるのです。だって、愛の神様に似せて造られたのですから！ 神様と共に生きる、交わることができるように造られた、唯一つの生き物、それが私たち人間です。そんな私たちが神様と交わることなく生きていくのなら、その人のからだは生きていても、たましいは死んでいるのです。毎週神様を礼拝し、毎日神様に祈り、いつも神様と交わってこそ、思う存分神様の祝福を味わえるのですよね！

ところで、皆さんの中で、これまでの一週間、「誰^{だれ}とも一言も話さなかった、たった一人ぼっちで誰とも関わらずに生きてきた」っていう人はいますか？ いらないよね。それは、私たちがお互いに心と心を通わせ、愛し合うことでこそ、生きていけるように造られているからなのです。神様は私たちを男と女に造られ、みーんな一人ひとり違う人間に造られました。互いに交わるように！ そして、神様と親しく交わり、神様と共に歩んでいてこそ、周りの人たちとも、本当に心と心が通い合う、良い交わりが与えられていくのですよ！

世界を治めるべき人間

神様は、ご自分に似せてお造りになった私たち人間に、とっても大切なお仕事を与えられました。それは、神様が愛して

おられるこの世界を、愛を持ってきちんと治めることです！ 実は、大変残念なことですが、世界中のあちらこちらで、美しい自然がめっちゃめっちゃにこわされたり、人間同士が殺し合ったりしてきました。それは、人間が神様の愛に背を向け、「自分さえよければいいんだ！」っていう考えで生きてきたからなのです。自分のために自然やほかの人々を思いのままにしようとするのは、罪深いことです。愛をもって自然を治め、人々を愛する姿こそ、神様に似せて造られた者にふさわしいですよね！ そのためにも、神様とものつと交わろう！

まとめ

私たち人間が、神様を愛し、神様が造られた自然や人々を愛し、神様と共に生きることが、どれほど大切で素晴らしいか、わかりましたね。そのために、今日から、これまで以上に聖書を読みませんか？ そして、心を静めてじっくり祈るときを持ちましょう！ せっかく神様と共に歩み、神様と交わるように造られたのですから！

♪海と空つくられた主は♪（イン8）

聖書 エペソ6・1～4 テーマ 両親に従う

序論

(石田高保)

人間が生まれてから最初に持つ人間関係は、言うまでもなく親との関係である。特に乳幼児期に親との健全な人間関係を持つことは、基本的信頼感を養う上で極めて重要であることがわかってきている(エリク・エリクソン)。この期間に受けた影響は、良かれ悪しかれ生涯に及ぶようである。昔の人もこのことに気づいており、それゆえ「三つ子の魂百までも」と表現したと思われる。

一、親を敬うことの祝福

〈あなたの父と母とを敬え〉、敬うとは、その人を重く見ることである。またこれには「おそれる」という意味もある(レビ記19・3)。神は子どもをこの世に送り出すためにその両親を用いられる。その意味において、両親にとって子どもが神からの賜物であるのと同様に、子どもにとっても両親は神からの賜物である。それゆえに両親はその性格と行状いかに関わらず、敬われなければならないわけである。

〈長く生きながらえるであろう〉、祝福の約束が伴っている。実際問題としても、親の言葉によく従う子どもは、そうでない子どもに比べてより危険を避け、概して賢明な選択をし、心配はより少なく、その結果、長く生きる可能性が高いと言える。また親に従うことを身に着けた子どもは、神に従うことを身に着けやすい(箴言22・6)。だからこのみ言葉は、単なる長生きを約束しているだけではなく、永遠の命を持つことまで約束していると言える。父母を敬うこと、また親がそのように導くことは、子どもの信仰の継承に不可欠の要素である。単なる親孝行の勧めではない。

ではこのみ言葉は、新約ではどのような反映されているだろうか。主イエスは明らかに両親を敬い、彼らにお仕えになった(ルカ2・51)。十字架の苦しみの中でも母マリアへの配慮を忘れなさらなかった(ヨハネ19・26～27)。

二、親を敬えるように育てる

父と母を敬うようにとのみ言葉は、子どもが親を重んじて、従うように命じているわけだが、それに関連して、そのような子どもに育て導く責任はその親にあることも聖書は命じている。〈父たる者よ。子どもをおこらせな

いで、主の薫陶と訓戒とによって、彼らを育てなさい、ここでの呼びかけが「母たる者よ」でないことに注意したい。聖書では子どもへの教育の第一の責任は父親であることが繰り返し明記されている。日本の生活史においても、母親が教育の責任を持つようになったのは、高度経済成長期からであるとも言われる。それは父親が家にいる時間が企業によって奪われるようになったことが主因であるという。それまでの日本社会は、原則として父親が家長として子どもたちの教育の責任を負っていた。それは聖書の価値観に通じるものであった。だからクリスチャンの父親は、自分の時間をやりくりして子どもの教育に関わることを考えてみたい。その場合の関わり方は、子どもを怒らせない、イライラさせない、つまりその子の主体性を重んじるということだろう。親として無数の失敗を繰り返すかもしれないが、関わりうとすること自体が、子どもとのきずなを深めることになる。

また「主の薫陶と訓戒とによって、彼らを育てなさい」だから親が孤軍奮闘するのではなく、主が共に働いてくださり、主が育てて下さるという信仰に立つのである。親にも教師にもできることは限られている。あとは子ども

もと主に任せるのである。その祝福はその子の生涯に及ぶ手ごたえのあるものである。「子をその行くべき道にしたがって教えよ、そうすれば年老いても、それを離れることがない」(箴言22・6)などは、その代表的なみ言葉である。

これまで見てきたように、養育期間にある子どもは親を敬い、その指導に従うように言われている。しかし、いったん結婚するならば、「人はその父と母を離れて、妻と結び合い、一体となる」(創世記2・24)わけだから、第一にすべき人間関係は親から夫(妻)に変えることになる。配偶者を二の次にし、親子関係優先させると夫婦関係に深刻な問題を引き起こす。それは聖書の原則ではないからである。それでも今日のみ言葉どおり、親への尊敬や交わり、援助などは保たれるべきである。

結論

子どもの時代に親をどう敬うか、あるいは敬わないかはその後の人生に強い影響を及ぼす重大な選択となる。だから私たちは自分の子どもに、そしてCSの生徒に親を敬うことの大切さとその祝福を折々に語りたいものである。

研究資料

(金井由嗣)

はじめに

本日の個所は引用されている旧約聖書の個所も含めて主の命令であり、そのまま受け止めるべきものである。とはいえ、私たちの社会には両親を愛し敬うことが容易ではない子どもたちが多く存在することに配慮しなければならぬ。「両親を敬え」との戒めの意味について、最初に近藤由美『新・親との関係を見つめる』を読んでおくことを勧める。特に家庭に問題がない場合でも、思春期の生徒を導くには最良の本である。同書の旧版(長谷川由美『親との関係を見つめる』)はパーソナルな証として書かれており、読みやすい好著である。心に傷を負った子どもや扱いにくい子どもを理解して受け止めるためには、田中哲『見えますか、子どもの心』、同『発達障害とその子「らしさ」』がお勧め。また飛鳥井望『PTSDとトラウマのすべてがわかる本』は具体的な手引きとして有用である。

テキスト

1 子たる者よ 夫婦に対する命令(5・22～33)と親

に対する命令(6・4)との間に位置している。子どもだけに従うことを命じているわけではない。親の命令がキリストの教えに反する場合、究極的にはキリストに従わなければならない。けれども、家族のそれぞれがキリストにあつてその責任を果たす家庭を築き上げることが主の命令の目的なのである(ブルース)。主にあつて(ギエン・キュリオ) エペソ書では一貫して「キリストにあつて」と同義語(ヘフナー)。命令の根拠は両親がどういう人であるかではなく、子ども自身とキリストとの関係にあることを教えている(コロ3・20参照)。これは正しいことである 接続詞[ギ]ガルを理由と取れば、「これは正しいことだからです」(新改訳)となる。あるいは強調と取つて「これこそ正しいことなのです」と訳すこともできる。信仰者として、神との関係における正しさ(義)が、状況や感情に優先するのである。ヴィスロフは、家庭生活についての聖書の教えが「愛」に言及していないことに注目する。もちろん家族が愛し合うべきことは前提だが、具体的な生き方(倫理)の規準は感情ではなく主の命令におくべきなのである。

2 第一の戒め 人との関係における(十戒の「第二の

板」の第一と理解することも可能だが、後とつなげて「約束を伴った戒めの最初」と解釈する方が適切である（新共同訳）。神の命令は神の民を祝福するためであり、戒めには約束が伴っている。律法全体を貫くこの大原則を示す「最初の」戒めが「父と母を敬え」なのである。

3 そうすれば、あなたは幸福になり、地上でながく生きながらえるであろう この約束は、両親を敬うことが個人的長寿をもたらすという呪術的・現世利益的な教えではない。神に「親として」召されて自分の誕生の直接の原因となった両親の存在に感謝し、「子として」の召しにおいて両親を敬い従うことが、与えられた人生を感謝して受容することの基礎であることを教えているのである（近藤）。また年長者を敬うことが習慣化した社会は、自分が高齢になった時に住みやすい社会であることは言うまでもない。

4 父たる者よ 「父」の複数形〔ギ〕パテレスは多くの場合、両親を意味する（ブルース）。父親だけでなく、母親もまたこの戒めの対象である。子供たちへの戒めと親たちへの戒めがセットになっていることは、4節が接続詞〔ギ〕カイによって前と結びつけられていることから明らか

である。子どもをおこらせないで…育てなさい 原文では子どもに対する命令「敬いなさい」と対等の命令形となっている。両親にもまた、親として神の命令に従うべき責任がある。おこらせないで には、「怒らせる」〔ギ〕オルギゾーに接頭辞〔ギ〕パラがついた強調表現が用いられている。子どもを全く怒らせないようにすることは不可能（かつ教育上マイナス）だが、子どもを不当に扱うことによって感情の暴走を招くことがないようにせよ、と命じているのである。主の薰陶と訓戒とによって、子どもに対する命令が「主にあって」とされていたように、両親も主（キリスト）との関係にもとづいて子どもに対する責任を果たすべきである。薰陶〔ギ〕バイデア）は教育を表す一般的な単語。訓戒〔ギ〕ヌーテシア）は「厳しく戒める」こと。子どもを教え導くことと厳しく叱ることは共に親の責任であり、それは「主がなされる」教育のわざを主から委託されて行う厳粛な責任なのである。

参考図書 上記の他、F・F・ブルース、M・ロイドジョーンズ『子供をしつけることの意味』、小林和夫、C・F・ヴィスロフ『キリスト教倫理』、H. W. Hoehner (Baker),

聖書

エペソ6・1〜4

タイトル

両親に従いましょう（母の日）

暗唱聖句

子たる者よ。主にあって両親に従いなさい。
エペソ6・1

目標

主にあって両親に従う者となる。

導入

（松浦みち子）

今日は母の日ですね。いつもみんなのためにいろいろとお世話くださるお母さんにありがとうと感謝の気持ちをあらわしましょう。

母の日の由来

母の日は今から百年ほど前、アメリカのヴァージニア州で起こった出来事がきっかけとなりました。ウエブスターの町の教会でジャービスという婦人が26年もの間、教会学校の教師として聖書を教えていました。ある日曜日、「あなたの父と母を敬え」の箇所からお話をし、「皆さんの中で、お母さんの偉大な愛に対し、心から感謝を表す方法を考え出してくれる人が現れることを願います」と語りました。その時、娘のアンナはお母さんの話を心にしっかりと受け止めて、どうしたらいいのかなと

考えるようになりました。その後、ジャービス婦人が亡くなり、教会で追悼式が開かれることになりました。その時、娘のアンナは、お母さんから聞いた言葉を思い出し、たくさんさんのカーネーションを飾り母を偲びました。このことが多くの人に感動を与え、やがて、百貨店主と呼ばれたジョン・ワナメーカーの店頭で5月第二日曜日に記念会が催され、これが母の日のきっかけとなり、全世界へと広まったのです。私たちも感謝を表そう！

大切な戒め

「あなたの父と母とを敬え」。これは、モーセの十戒の第五番目の戒めです。第一から四は、神様に関する戒めで、第五から十は、人に対する戒めです。特にこの第五の戒めには、「そうすれば、あなたは幸福になり、地上でながく生きながらえるであろう」と、約束がついています。聖書には「何事についても両親に従いなさい。これが主に喜ばれることである」（コロサイ3・20）と教えられています。主に喜ばれることが一番の幸せの基です。しかし、人間にはわかっていてもやめられない、わがままな心、すなおに従えない罪の心があります。イエス様の十字架で罪ゆるされ、主に喜ばれる歩みをするなら、

幸せいつぱいの日々を過ごすことができるのです。その結果、心も体も元気になって長生きすることになるのでしょうね。

祝福の約束を手にするために

すばらしい約束はわかりました。しかし、ちょっとと腕を組んで考えてしまうことがあります。○○ちゃんのお家は、お父さんもお母さんもクリスチャン。でも、僕の家はぜーんぜん。あるいは、お母さんだけがクリスチャンというお家もあるでしょう。神様は、両親がすばらしい人だから敬えと言われたのでしょうか。いいえ、違います。たとえどんな両親であっても敬いなさいと命じられています。その秘訣は「主にあつて」ですね。

約束を手にしたあかし人

Sさんのお父さんは、お酒を飲むとお母さんに暴力をふるう人でした。小さい時から、「どうして自分の家はこんなだろう。父さえないなければ」といつも思っていました。ある日、お母さんが耐えられなくなったのでしよう、突然、家を出て行ってしまいました。Sさんは、泣きながら自分を育ててくれた母を思い出し、慕いながらも、決してゆるしたくないという思いで悩みつつ、生

きていました。やがて、就職するのですが、職場のクリスチャンに誘われ教会に行き、イエス様を信じて救われました。今までの重苦しい悩みが消え去り、喜びに満たされ献身へと導かれて牧師となりました。ある年の母の日に、奥さんがこう言いました。「毎年、私が母の日カードを書いてきたから、今年はあなたが書いてよ」という言葉に「ありがとう」が書けない自分に気付かされました。それをきっかけに、Sさんはこれまでの人生があつたからこそ、イエス様を知ることができたことを思い、奥さんと共にお母さんを訪ねて行きました。そして、今までの思いを告げ、「今までのことがあつたからこそ、イエス様に出会えた。お母さんで良かった。ありがとう」と言うとお母さんが泣き出しました。母親がどうであれ、Sさん自身が、主にあつてお母さんに感謝することができるようになったのです（「よろこびの泉」二〇一三年12月号より）。

私たちも、主にあつて、両親を敬う子どもにしたいだきましよう。神様はきつとあなたを祝福し、幸福な人生を歩ませてくださることでしょう。

♪しゅにしたがうことは♪（こ改119）

聖書 創世記2・15、3・1、7 テーマ 罪の起源

序論

(金井信生)

はなはだ良いものとして造られた世界に、罪と死が入り込みました。それは「神のかたち」として造られた人間が、何によって生かされているのかを見失ってしまった結果でした。

一、神の戒め

主なる神は人を造り、エデンの園に置されました。園は豊かに潤い、「見て美しく、食べるに良いすべての木」(9)がはえていました。主なる神は、「あなたは園のどの木からでも心のままに取って食べてよろしい」とおっしゃられました。ただ、「善悪を知る木からは取って食べてはならない」と命じられました。

一章において「地を従わせよ、すべての生き物を治めよ」と命じられた人間ですが、今度は、自分自身の心を主の戒めに従って治め、従わせなければなりません。最大の難関ですが、神の言葉に従うことのできる自

由な意思を、すでに人は与えられています。

神の戒めは、人を苦しめるためではなく、命を保たせるためのものです。また、神のかたちに造られた人間に、「これができるよ」と信頼が込められた言葉です。「戒め」と聞くと、どうしても窮屈に感じますが、神は全体的には人に自由を与えられるお方です。十戒を見ても、神と隔てなく交わりがあれば当然のことや、人間関係でも本来する必要のないことをあらためて戒められているだけです。

〈食べると、きつと死ぬ〉という言葉も人をおどす言葉ではありません。まだ死が入ってきていなかったときに、死の恐ろしさも悲しさも人は知りませんでした。善悪の木に関する戒めは、この木の実に何か毒があるからではありません。神に従うことよりも自分の考えを選んで、命の源から切り離されてしまうことが、死そのもののなのです。

二、へびの存在

ここに登場するへびは、人を誘惑し、神にそむかせる悪魔の存在を示すものです。しかし、人間の側に隙(す

き)がなければ、へびも立ち入ることはできません。

へびの言葉は、人の目を、神から与えられた「どの木からでも」という大きな自由からそむけさせ、小さな禁止の方向に向けさせました。また、その禁止が、〈どの木からも取って食べるな〉という、大きな重荷であるかのようを感じさせました。

「これこれをしなさい。他のことは考えてはいけない」というのと、「これだけはしてはならない。しかし、他は自由にしなさい」というのと、どちらがより人間らしく、また創造的に生きることができそうでしょうか。

へびの言葉は、神に従うことは縛り付けられることなどではないかという、疑いの心を起こさせました。エデンの園という、これ以上ない恵まれた環境にいても、客観的に自分の姿と周囲を見ることができませんでした。やはり、「み言葉にしたがって、それを守るよりほかにありません」(詩119・9)とあるように、神の言葉に従う以外に、自分を正しく保つことはできないのです。

三、心がひかれて

へびの言葉は、神の言葉を否定し、人間に自由がない

かのように誘いかけました。女は答えますが、〈これに触れるな〉と神の言葉に付け加えて強調し、一方では〈死んではいけないから〉とゆるめています。

神の言葉からそれだした女は、ついに禁じられていた木の実に目を向け、そそのかされて手を伸ばし、食べてしまいました。

また、女にその実を手渡された夫も、食べてしまいました。男は女のそばにいながら、へびとのやりとりにも、女が手を伸ばして実を取ることに間関わってきません。「肉の欲、目の欲、持ち物の誇」(イヨハネ2・16)と指摘される罪の根も、愛のあらわれてこない「無関心」も、初めの罪から存在し、今に至っています。罪はまず心の問題であり、神と交わる霊の問題なのです。

結論

罪の本質は、神のもとで生きることをやめることです。誘惑や試練によって疑いと不信仰に陥らせる罪の力に対しては、み言葉に正しく立って神との交わりに守られるほかはありません。

研究資料

(井上義実)

今週より創造の次となる人間の墮落の単元が始まる。本箇所はエデンの園で起った、へびが関わる誘惑、人間の陥罪かんざい記事である。

テキスト

15 エデンの園 エデンは発音どおりの音写で、語源は明らかではない。シュメール・アッカド語のエディヌ(荒地、または平地)から来ているとも考えられる。園(ヘガン) 囲われた場所という意味である。ギリシャ語七十人訳聖書では、ベルシャ語源のパラディソン(英語のパラダイス)と訳出。エデンの園とパラダイスを同一視する考え方はここから来ている。地理的には一般にチゲリス川、ユーフラテス川の間地域と考えられるが、明確に同定することはできない。これを耕させ、これを守らせられた 耕させ(ヘガン) 耕作、農耕を意味する。人間の勤労は農業と、園の管理から始まったのである。神がまず働かれて創造がなされたように、人間の怠惰、安逸のために園が造られたのではなく、神に仕えるためである。

16-17 あなたは園のどの木からでも心のままに取って食べてよろしい。しかし善悪を知る木からは取って食べてはならない。神は人間に、他の動物にはない自由意志を与えられた。人間が神のかたちに造られ、神との愛の交わりを持つものとされたからである。自由とは、好き勝手と同義語ではなく、明確な責任を伴うものである。人間は神の被造物として、神に従順であることが求められている。神の命令を守ることは、人間の側で何の解釈も差し挟むことのできない絶対なものである。食べてはならないという動詞は強意語幹が用いられ、最も強い禁止を表わす表現となっている。それを取って食べると、きつと死ぬ 禁じられた木の実を食べることの刑罰は、死という厳しさである。神の断固とした意思を思わされる。

1 ヘビ(ヘナーハース) ヘビを指すいくつかの言葉が旧約聖書中にあるが、一般的に用いられる語である。へびは各地の神話や伝承に良く出てくるが、古代中東でも悪魔的な関連をもつものとして捉えられてきた。黙示録12・9では悪魔は年を経たへびと記されている。誘惑と陥罪にへびは関わったが、短絡的に動物のへびが悪魔

であるとは言えない。へびが最も狡猾であった 新共同訳では、狡猾を賢いと訳出。この出来事で人間は自由を誤って用いたように、へびは賢さを誤って用いた。どの木からも取って食べるな 人間に罪を犯させようとするへびの巧妙なすり替え、誘導が始まる。へびが悪魔であるとは言えないが、悪意、邪悪さは際立つものがある。神が食べるなど命じられたのはただ一本の木であるのに、へびはまるで全部であるかのようにエバに問いかけた。人間は神の善意を全く疑わなかったが、へびの問いは神が厳しく理不尽であるかのように思わせた。

3 これに触れるな、死んではいけないから エバはへびの誘導にのせられてしまう。へびの問いは誤った問いかけであるから、「違う」と明確にへびを退ければよかった。触れるなどは神は言われていない。神は「死んではいけない」と言われたのではなく、「きつと死ぬ」と言われた。エバの心の変化、退歩をへびが見逃すはずはなかった。

4 あなたがたは決して死ぬことはない 神が「きつと死ぬ」と言われたことを、へびははっきりと否定している。神への恐るべき反逆である。

5 あなたがたの目が開け、神のように善悪を知る者となる へびの論点は、神は人間をご自分よりも低い存在に止めておくために、禁止をされているという点にある。へびはこのことが極めて不当なことに、エバに思い込ませようとした。へびは人間が神のようになるという、素晴らしい魅力を語って誘惑した。

6 食べるに良く、目には美しく、賢くなるには好ましい すでにエバからは、へびの言葉を否定し、正しい道に歩む力がそぎ取られていた。誘惑は理性に働くのではなく、五感に働く。その実を取って食べ、…彼も食べた神様に従うことを踏みにじったエバであった。側にいて止めるべき夫も、無批判に同調し、同じ行動をとった。

7 ふたりの目が開け へびが言ったように、即座に死ぬことはなく、二人の目は開かれた。しかし、二人は神のようになったのではない。二人が最初に知ったのは、罪と恥である。それは、罪の結果として、神を避け、自分を覆い隠そうとする行為である。二人の体はその場で死ぬことはなかったが、死は確実に入り込んだのである（ローマ6・23）。

参考図書 4月27日分に同じ。

聖書 創世記2・15～17 3・1～7

タイトル 恐ろしい罪

暗唱聖句 善悪を知る木からは取って食べてはならない。それを食べると、きつと死ぬであらう。

目 標 罪が不信仰から生まれることを知り、み言葉に信頼し、従う者となる。

創世記2・17

導入

(飯田勝彦)

皆さんは、失敗をして学校の先生やお父さん、お母さんから怒られたことがありますか？ 同じ失敗を繰り返さないためには、反省が必要です。

今朝の箇所には、アダムとエバが失敗してしまったことが書かれています。このことによって私たち人間に恐ろしい罪が入りました。どうしてアダムとエバが失敗してしまったのでしょうか。そのことを知ること、私たちは、罪を犯すことから守られます。

神さまの言葉

最初の人アダムは、神さまが最初にお造りになった人間です。私たち一人一人も、アダムと同じように神さま

の作品として造られ、愛されています。

ある時、神さまはアダムをエデンの園という素晴らしい場所で生活できるようにされました。アダムは、とても喜んだに違いありません。神さまは、アダムがそこで生活するとき、一つの命令をされました。それは、「園のどの木から思うままに取って食べて良いが、善悪を知る木から取って食べてはいけない」という命令でした。「食べる」ときと死ぬであらう」と言われたのです。

命令されることを嫌がる人もいます。でも、神さまの命令は、私たちが幸せになるための大切な言葉なのです。今も神さまは私たちに大切な言葉を与えておられます。それが聖書です。神さまの言葉である聖書を読んで守る人は、罪から守られ幸せになれます。

悪魔の誘惑

神さまは、アダムにエバを妻として与えました。アダムはエバと一緒に助け合って生活しました。また、彼はエバと一緒に神さまと親しく交わり幸せな日々を過ごしていました。

しかし、ある時、エバのところに悪賢いへびがやって来ました。へびはエバに近づき彼女に「神様は、園のど

の木からも取って食べるな、と本当に言ったのか」と話しかけてきたのです。これはエバに疑いを持たせる言葉でした。ヘビの言葉にエバは「どの木から食べても良いが、園の中央にある木からは食べるな、食べて死んではいけないから」と答えたのです。神さまは「きつと死ぬであろう」と言われたのに、エバは神さまの命令を「死ぬといけないから」に変えています。エバは神さまから聞いた命令どおりにヘビに答えなかったのです。ヘビはエバを誘惑して「あなたは決して死ぬことはないでしょう。それを食べると目が開け、神のように善悪を知る者となることを、神さまは知っておられるのです」と言い寄ります。すると、エバはヘビの言葉に騙されてしまいました。取って食べてはならない木の実を食べてしまったのです。彼女はそれをアダムにも与え、彼らは2人で罪を犯してしまいました。

ヘビは悪魔です。皆さんは、悪魔がいることを知っていますか。悪魔は今でも、皆さんを神さまから遠ざけ不幸にしようと誘惑をします。悪魔の誘惑にのらないように気をつけましょう。

アダムとエバのようにならない

アダムとエバの失敗を皆さんは、笑いますか。彼らの失敗を、私たちがしないとは限りません。ですから、どうして彼らが失敗してしまったのかを知ることは大切です。エバは神さまの言葉よりヘビの言葉を信じてしまったのです。また、アダムは直接、神さまの言葉を聞いていたにも関わらず、従うことができなかったのです。私たちは、悪魔の誘惑から逃れることはできません。でも、誘惑に負ける必要はないのです。悪魔は、私たちに「神さまを信じたって何の意味もないし、聖書の言葉は、本当じゃないよ」と心に語りかけてくることがあります。もし、皆さんが悪魔の誘惑に乘せられて、神さまを疑うなら、アダムたちと同じ失敗をしてしまいます。

まとめ

ですから、神さまの言葉をよく聞きましょう。そして、それを疑ったり忘れたりしないで、いつも神さまの言葉を信じて進んで行きましょう。

♪せいしよはとうとい♪ (ホ128)

聖書 創世記3・6・19 テーマ 罪の結果

序論

(金井信生)

主の言葉に従わず、自分の思いのままに行動した人と女に大きな変化が起きました。すぐに心に起こった「恥ずかしい」という気持ちと、やがてあらわれる「死」です。どちらも神との関係が断たれたことの結果でした。

一、身を隠す者に

禁じられていた木の実を食べてしまった二人は、主の歩まれる音を聞いて身を隠しました。さらに「あなたはどこにいるのか」との主の呼びかけに、「わたしは裸だったので、恐れて身を隠したのです」と答えました。

ここには神との関係が断たれた結果として、人は「裸」、「恐れ」、そして「身を隠す」三つのことを感じています。今までも「裸」でしたが、罪を犯してからは、裸であることを恥じ、恐れるようになりました。自分を守っておられる主への信頼を失い、主に見られて困る部分があ

ることを意識するようになったからです。これはそのまま、他人との関わりにおいても、互いの信頼を失い、自分の姿をそのまま見せられない関係になりました。

へびの言葉どおり、禁断の木の実を食べた後に「善悪を知る者」となりましたが、善悪を知るだけで、これを治めて、悪を遠ざけ、善に進む力はありません。また悪を行った結果の罪を始末することもできません。

へびは「決して死ぬことはないでしょう」と言いしました。木の実を食べてすぐに二人が死ぬということはありませんでした。しかし、確かに死は入り込みました。命の源であり、体だけでなく、心も霊も養い守られる主との関係が断ち切られたからです。

二、「死」が入り込む

「死」とは、呼んでも答えが返らず、自分の意思で自分の体を動かせない状態です。人は罪を犯した結果、神との交わりを失い、他人との関係も乱れ、自分自身を正しく治めることもできなくなりました。

主が「これを食べてはならない」と命じられたのは、木の実に毒があるからではなく、神と人との関係を正し

く保つために境界を定めるためでした。

人が神のようになろうとして、この境界を踏み越えてしまったとき、神との関係を失うだけでなく、自分が何者であるのか、どこから来てどこへ帰るのかということを見失ってしまいました。木の実を食べて、すぐに死んだではありませんが、死に向かって滅びの道を転がり落ちる者となったこと、それが主の告げられた「きつと死ぬ」ということでした。

三、責任を認めない

神との関係を失った人は、共に神の前に歩み、神の御旨のままに互いを愛し合って生きるはずだった、人との関係も失いました。「あなたは取って食べたのか」と問われても、自分が犯した罪を認めることも、責任を負うこともせず、「わたしと一緒にしてくださったあの女が」と、責任を女に、さらには女を与えた神に転嫁しようとしします。先には「わたしの骨の骨、肉の肉」とまで喜んでいましたが、神に支えられない人間の愛のはかなさがよく表れています。

後に人と女は、息子が与えられますが、兄のカインが

弟のアベルを殺すという、大きな痛みを経験します。善悪を治める力がなく、責任を負おうとしない罪の性質そのものを、自分たちの歩みを鏡に映すように見せられることになりました。

主なる神は、へびに、女に、そして人にそれぞれのさばきを下されました。「罪を犯した者は、その者が死ぬ」(新改訳 エゼキエル18・4)との原則は、はじめから示されています。額に汗して働き、また人間関係の破れに直面し、生きていることの辛さを経験しなければならぬ、そこにも死の力が及んでいます。

人が罪を犯してからの度々の主の言葉は、人に痛みをもたらししました。しかし、主は切り捨てるためではなく、人に罪を自覚させ、救いを求めさせるために、愛をもって呼びかけ、あえてきびしくさばいておられるのです。

結論

罪を罪としてさばき、ひとりの魂も滅びることを望まれずに救いの手を差し伸べておられる主の前に、自分の罪の真相を認めて、そのままで近づき、み言葉に従って命の道に歩みましょう。

研究資料

(井上義実)

先週に続いて、エデンの園で起った、人間の陥罪かさいの記事である。

テキスト

6 食べるに良く、目には美しく、賢くなるには好ましい
 食べるに良いという思いは、食欲という肉欲に働きかけた。目には美しいという感情は、所有欲、独占欲に働きかけた。賢くなるだろうという感覚は、傲慢な思いからの名誉欲に働きかけた。エバは悪魔の声に耳を傾け、心を動かされた。今まで目にしていても、さほど気にならなかった実を新たに眺めた。その実に手を伸ばし、口に運んで食した。罪に至る誘惑は、自制心をマヒさせるほど強く感情に働く。罪を実行するまでには幾つかの段階がある。エバはアダムにも実を食べるように勧めた。罪は次の罪を生み出していく。

7 ふたりの目が開け へびが言ったように、即座に死ぬことはなく、アダムとエバの目は開かれた。しかし、二人は神のようになったのではない。二人が最初に知ったのは、罪と恥である(先週に同じ)。二人が今まで裸であった

のは、神との間の隔ての無さを表している。裸でありながら、男女の性的な差異があっても、恥ずかしさや欲望を感じなかった。それ以後の関わりとは違うきよい交わりが、男女間にあったことを示している。対神、対人それぞれの関わりは、現在とは異なった形の親しさであった。二人は、いちじくの葉をつづり合わせて腰に巻いた。この行為は、手近なもので罪を覆い隠そうとする人間の本性を表わしている。

8 日の涼しい風の吹くころ 夕方を表す慣用句である。ユダヤ人は古代、昼を四つの時に分けたが、第三の時である午後三時から六時に当たる。海から陸に向けて強い風が吹く時間帯である。神の顔を避けて、身を隠した 神の顔という表現に、神の人格性を見ることができる。顔と顔を合わせるという、個人的な対面を神は望まれている。罪は神から人間を遠ざけ、神との交わりを分断させるものである(イザヤ59・2)。

9 あなたはどこにいるのか 神は、身を隠した二人がどこにいるのか解らないお方ではない。二人が神に対して、明白に応答するように求めておられるのである。今まで、「はなはだ良かった」(1・31)という完全な調和があった

が、人の不服従によって打ち消されてしまった。神の痛みと悲しみの響きが伴う言葉である。

11 あなたは取って食べたのか 木の実を食べる以前は、裸であることさえ知らなかったアダムである。全知である神は、何があったのかをすべてご存知であった。神の質問の意図は、アダムが罪を認め、罪と向き合うことにあった。アダムは、自分が犯した罪の責任を負おうとはしなかった。

12 わたしと一緒にしてくださいましたあの女 このできごとの責任は、エバを造り自分に与えた神にあり、エバが誘惑に負けたことにあると、アダムは不平を述べる。

13 へびがわたしをだましたのです エバには悪意をもって自分に近づいたへびの意図を十分に知る力があった。エバはへびの言葉を否定し、へびを退けるべきであった。ただへびにのみ責任を負わせることはできない。

14 最もものろわれる 14節以降には、神に背いて神の命令に従わなかったへび、エバ、アダムへの処罰が語られる。へびは賢さを誇っていたが、賢さを悪事に利用したことによって、わざわいとのろいを受けるものとなった。腹で、這いあるきのろわれる以前は足があったということなのか、どのような移動をしていたのかも解らない。以前はど

うであれ、現在のように身をくねらせ、腹で地面を這うという姿にへりくだらせられた。ちりを食べる 実際にちりを食物とするということではない。へりくだらせられるという慣用的な表現である。ちりをなめる、という語句も同義的な表現である（詩篇72・9他）。

16 産みの苦しみを大いに増す 他の動物と比較して、人間は二足歩行のゆえに最も難産である。エバは命の木の実をも食べようとしたかも知れない。新たな命を生み出すために大きな代償を払わなければならなくなった。あなたは夫を慕い、彼はあなたを治める エバが神に背いたことは、神よりも上に立とうとした傲慢（ごうまん）であった。支配したいと願ったエバは、支配される側に立たされた。

17 地はあなたのためにのろわれ エデンの園では、労働は神への喜びの献（けん）げものであったが、今や、日々の糧を得るために、苦役さえ覚えるものになってしまった。

19 土に帰る 神への背信、不服従は、労働の困難さのみならず、死という最大の代償を支払うことになった。

参考図書 4月27日分の他、B・F・バックストン『創造と墮落』他

聖書

創世記3・6、19

タイトル

心を点検しよう！

暗唱聖句

罪の支払う報酬は死である。

ローマ6・23

目標

罪の結果の恐ろしさを知り、罪を悔い改める。

導入

(飯田勝彦)

ある所に、俊介君という小学三年生がいました。ある時、お母さんが買い物に出かける前に「今からお母さん買い物に行くけど、台所にあるお菓子は絶対食べてはダメよ」と俊介君に言いました。「うん、わかった」と俊介君は答えました。その後、お母さんが出かけた間に俊介君はさっそく台所のお菓子をこっそり食べてしまったのです。皆さんは、「やっつてはダメ」と言われると逆にやりたくなってしまうことがないですか。それはどうしてでしょう。原因を探していくと、それはアダムとエバの失敗につながるのであるのです。

アダムとエバの失敗

アダムとエバは、神さまの言葉を破ってしまいました。

それはどうしてだったのでしょうか。それは、へびに誘惑されて神さまの言葉を疑ってしまっただからです。そして、彼らは「食べたなら死ぬ」と言われた実を食べてしまい、アダムとエバに罪が入ってしまった。

皆さんはアダムとエバの失敗の話なんて、僕には関係ない」と思いますか。実は、そうではありません。俊介君が「ダメだよ」と言われたことを「やろう」とする思いは、私たちの心の中にもないですか。「そんなのなに！」というお友だちもいるかも知れません。でも残念ですが、この思いは私たちみんなにあります。それは、このアダムとエバに入った罪が私たちにも流れているからです。

罪が入った私たち

皆さんは毎日、水を飲んでいるでしょう。私たちが口にする水は、浄水所で綺麗きれにされて送られて来ます。でも、浄水所に毒が入れたらどうでしょう。水は、毒水になってしまい飲むことは出来ませんね。それと同じように、最初の人間であるアダムとエバの失敗によって、私たちにも罪が入ってしまったのです。ですから、私たちは悲しいことに生まれた時から心に罪を持つ罪人と

なってしまったのです。罪があると私たちはどうなるのでしょうか。それは罪を犯したアダムとエバを見れば分かります。

アダムとエバは、罪を犯す前は、神さまと仲良く過ごしていました。裸でしたが、何も恥ずかしくなかったのです。それぞれが、ありのままの姿で生活することができました。でも、罪が入ってからアダムとエバは、親しくしていた神さまが恐くなってしまったのです。そして、神さまから隠れるようになりました。

皆さんは、自分が悪いことをした時、お母さんや友だちが恐くなり、ちゃんと顔を見て話せなくなっただけではありませんか。また、友だちに嘘をつかれて仲が悪くなったことはありませんか。罪は神さまとの関係を壊します。そして人との関係をも壊します。

罪が入る前は、アダムもエバも死ななくても良かったのです。でも、彼らに罪を犯したことで死ななければならなくなりました。

今朝の暗唱聖句に「罪の支払う報酬は死である」とあります。仕事をすると、その代わりに給料という報酬をもらいます。罪を犯すと死をもらうのです。アダムとエ

バは、罪を犯したことで死をもらうことになったのです。それは、私たちも同じです。皆さんの中に「僕は絶対に死なない」と言える人いますか。私たちは罪によって死を避けることはできません。

罪を悔い改めよう

皆さんは死にたくないでしょう。でも、私たちの体はみな、一度は死にます。もし心の中に罪を持ったまま、罪を犯し続けるなら永遠に滅んでしまいます。でも、永遠に神さまと共に生きることのできる人もいます。それは、自分の罪を認めて悔い改める人です。

皆さんは永遠の滅びを選びますか。それは望まないでしょう。ですから、どんな小さな罪でも神さまの前に悔い改めましょう。悔い改めるとは、罪をお詫びして心を神さまに向けることです。

まとめ

恐ろしい罪が心があれば、神さまは悲しまれます。また、お友だちとの関係も壊れてしまいます。今、自分の心の中を点検しましょう。罪があれば、今日神さまの前に悔い改めましょう。

♪じゅうじか♪ (ホ62)

聖書 創世記3・14～24 テーマ 救いの約束

序論

(金井信生)

罪を犯してから、人と女は裸を恥じて、いちじくの葉を腰に巻きました。主なる神は二人の罪をさばき、エデンの園から追放されますが、その前に二人に皮の着物を造って着せられました。神は罪をさばく方であり、また救いの道を備えられる方だからです。

一、救いの約束

主は人と女の前に、へびに対するさばきを宣言されました。ここから、「悪魔でありサタンである龍、すなわち、かの年を経たへび」(黙示録20・2)が滅ぼされるまで、聖書は神に敵対する者が存在し、人を恐れ惑わせることをはつきりと示しています。

私たちも、かつてはこの「空中の権をもつ君」(エペソ2・2)に従わされていることも知らずに、罪の中を歩んでいました。しかし、今は霊の目を開いていただき、「やみの世の主権者」(エペソ6・12)との戦いの中にあ

ることを常に覚え、主によって戦いの備えを与えていただかなければなりません。ただし、この戦いの帰結はすでに定まっています。

主はへびに対して「恨みをおく」、「砕く」と戦いがあることを告げられると共に、「彼はおまえのかしらを砕き、おまえは彼のかかとを砕く」と、最後は決定的な勝利をもって終わることを宣言されました。これは、アダムとエバの子孫としてお生まれになる、主イエス・キリストの十字架による救いをあらかじめ示すものでした。

十字架においてキリストは苦しめられ、命を落とされますが、これは人のすべての罪のさばきを代わって負い、贖い^{あがな}をなしとげるためであり、復活されたキリストは罪と死の力に対して完全に勝利されました。

主は、罪を犯した者に罪を自覚し悔い改めるよう呼びかけるだけでなく、自らの主権をもって罪の力を滅ぼす救いの約束を与えられたのです。

二、備えられた皮の着物

救いの約束は希望として与えられましたが、この約束を信じて受けるしるしとして、主は人と女に皮の着物を

造って着せられました。

《いちじくの葉》は、すぐにちぢれ、動くと破れる、もろいものです。自分を隠し、また飾ろうとしても、一時的であり、また取り繕い続けなければなりません。

しかし、神が与えられる着物は、ただ丈夫であるだけではありません。《皮の着物》が造られるためには、何かの動物が殺され、血を流さなければなりません。神はご自分が造られた生き物から、与えられた命を取り去るといふ犠牲を払ってまで、私たちへの思いを示し、守りを与えられました。

罪のために死が入り込みましたが、人と女が知った最初の死は自分が守られるための犠牲の死です。これは、やがて十字架につけられるキリストを指し示す神のみわざでした。私たちは「主イエス・キリストを着なさい」(ローマ13・14)と勧められています。義の衣であるキリストを信じ受け入れる以外に、神の前に立つことも、また罪の世にあって罪に打ち勝つこともできないからです。

三、神のもとに帰る道

救いの約束を聞き、皮の着物を着せていただいたアダムとエバですが、エデンの園にとどまることは許されませんでした。罪は罪としてさばきを受け、自覚的に罪を認めて悔い改め、救いを求めて神を仰ぐ信仰を身に着けなければならぬからです。

人が追い出された後、エデンの園は天的な存在によって守られます。つまり、そこへの道は人の目には隠されたのです。それは、人の知恵や力ではなく、ただ主を信じ委ねる、信仰による救いの道に導くためでした。旧約時代には、来るべき救い主を信じて義とされ、今はイエス・キリストの十字架の贖いによって、私たちは罪赦された喜びと感謝をもって、大胆に神の前に出て行くことができますのです。

結論

救いの道は、すべて主の主権によるものです。私たちはただ、自分の罪を認め、悔い改めて、主イエスを救い主と信じましょう。み言葉が私たちの救いを証しし、励まし助けています。

研究資料

(井上義実)

さらに先週に続いて、エデンの園で起った人間の陥罪^{かんざい}の記事である。神は、単なる処罰に終わらせず、救いへの道を最初から備えられたのである。先週、先々週分研究資料も参照されたい。

テキスト

15 彼はおまえのかしらを砕き、おまえは彼のかかとを砕くであろう。へびに対するのろいについて語られた箇所である。砕き(へ)シユプ) 旧約聖書中、他に「砕く」と訳される語はあるが、この語は他に二箇所に出てくるのみである。「破壊する、こなこなにする」という強い表現を持つ言葉である。へびと女との間に、へびの子孫と女の子孫との間に恨みを持つ、敵対関係が生まれた。へびとは、私たちが目にする爬虫類^{はちゅうりゅう}のへびを越えて、黙示録で言及されるように、「年を経たへび」と称される悪魔をも指している(黙示録12・9、15、20・2)。女のすえとは、時が満ちて母マリヤから生まれるイエスを指している。互いに砕く、砕かれるとは、悪魔とイエスとの十字架の場面での戦いについての記述である。イエスは、

エデンの園での人類の陥罪以来、人類のすべての罪のあがないとして、十字架の上で命を捨てられた。イエスの十字架の死によって人類に救いの道が開かれた。この救いの成就によって、人を罪に陥れ、滅びに向かわせる悪魔の働きは、大きな打撃を受けた。イエスは十字架において、悪魔に対して、かしらを砕くという致命傷を負わせたのである。悪魔もまた、イエスのかかとを砕く、つまり十字架の死に追いやることによって抵抗した。かかとの傷では身体の生命に関わる機能は損なわれない。イエスは復活の栄光によって救いを成し遂げ、信じる者に永遠の命を保証された。悪魔は今も人を惑わし罪を犯させ、神から引き離そうと躍起になっている。先に黙示録の言及に触れたが、悪魔は新天地が完成される前に、完全に滅ぼされることが定められている(黙示録20章参照)。現在、悪魔は霊的な働きを続けているが、それは残された期間の中での限定されたものである。この箇所はプロトエバンゲリウム(原福音)と称される。人類が最初に罪を犯してエデンの園から追放される時に、すでに救いの福音が提示された箇所であるからである。

20 人はその妻の名をエバと名づけた エバ(へ)ハヴァ)

ギリシャ語七十人訳聖書で「エウア」と訳され、やがてエバとなる。「命、生き物」を意味している。エバは、カイン、アベル、セツを生み、人類の最初の母となった。

21 皮の着物を造って、彼らに着せられた 神はアダムとエバをエデンの園から追放される前に、皮の着物を造って、彼らに着せられた。善悪を知る木の実を食べた時に、彼らはいちじくの葉をつづって腰に巻いた。すぐに破れ、ちぢれてしまうものではなく、神は丈夫な衣服を与えられた。罪のない動物が犠牲となって、彼らの身を守る装いが造られた。旧約でささげられた動物の犠牲を越え、私たちのために十字架であがないとなってくださったイエスを想起させる出来事である。

22 人はわれわれのひとりのようになり、善悪を知るものとなった アダムとエバは善悪の木の実を食べたことによって今まで知らなかったものを知った。彼らは、善悪の区別を知ることができたが、善を行い、悪を退ける力は不十分であった。善とは神に従うことである。善に生きる者であるなら、神の命令に反して、命の木の実を食べるはずはない。神が心配されたのは、先と同じように、誘惑に負けて命の木の实を食べ、悪に染まったまま

永遠の命に生きることである。人は罪をあがなわれ、義とされ、神の子とされて、永遠の命に生きなければならぬ。イエスの十字架のあがないのみが、永遠の救いの源なのだから。

23 エデンの園から追い出し 神に背いた罪の結果、女性性は産みの苦しみを持つものとなり、男性は苦勞して日毎の糧を得るものとなった（先週分研究資料参照）。人はエデンの園から追放された。エデンの園をバラダイスとする考えから、この出来事は失樂園と言われる。

24 ケルビムと、回る炎のつるぎ ケルビムは天的な存在であり、一般には手足を持ち、翼をもって飛びかける。ケルビムは理性と、超越的な力を持つ。幕屋では契約の箱の上に純金のケルビムの像が置かれた。神殿ではさらに大型のケルビム像が契約の箱をおおっていた。神殿の壁や扉にも意匠いしょうが施しされていた。エゼキエルが見た幻では、人、獅子、牛、鷲わしの四つの顔を持ち、人の手、子牛の足、四つの翼を持つ（エゼキエル10章参照）。ケルビムと、超常的な回る炎のつるぎによって、人は命の木にたどり着くことはできないのである。

参考図書 4月27日分に同じ。

聖書

創世記3・14、24

タイトル

イエスさまに救って頂こう！

暗唱聖句

主なる神は人とその妻とのために皮の着物造って、彼らに着せられた。

創世記3・21

目標

キリストによる救いを知り、救いを得る者となる。

導入

(飯田勝彦)

皆さんはレスキュー隊員が、遭難した人などを捜索し助け出す場面を見たことはありませんか。もし、皆さんが遭難した人ならどのような気持ちでしょうか。「早く助けて！」と願うでしょう。

私たち人間は、恐ろしい罪の波に吞まれ遭難している状態であることを知っていますか？「自分は、罪とは関係ない」と思っていますか？アダムとエバが罪を犯したことで、私たちは罪人となり罪の中で溺れているのです。その結果、私たちは皆、深くて恐ろしい罪の暗闇に閉じこめられてしまったのです。でも、神さまは私たちをその暗闇から救ってくださるお方です。

悪魔を滅ぼす神さま

アダムとエバは、神さまとの約束を破って、食べてはいけない木の実を食べてしまいました。それはどうしてだったのでしょうか？それは、ヘビがエバを誘惑したからでした。ヘビは、悪魔サタンです。悪魔は、神さまや私たち人間同士の関係を壊そうと今も働いています。でも、この悪魔を神さまは、いつまでもそのままにしておく方ではありません。神さまは、アダムとエバが罪を犯した後、直接、悪魔に言われました。「彼はおまえのかしらを砕き、おまえは彼のかかとを砕くであろう」と。神さまは、悪魔を必ず滅ぼされることを約束されました。

愛される神さま

皆さんは、嘘をついたり、嫌なことをしたりする友だちを好きになれますか。また、裏切った人に優しく話しかけたり、親切にしたりできますか。

アダムとエバは、神さまの約束を破りました。彼らは、神さまを裏切ったのです。そして、神さまを恐れ、隠れてしまいました。神さまは、裏切って隠れてしまった彼らを見捨てられたでしょうか。いいえ、そんなことはされませんでした。

神さまは、裏切って隠れたアダムとエバを「あなたは、どこにいますか」と探されました。しかも、彼らに近づいて話しかけられたのです。それだけではありません。神さまは、裸でいる彼らのためになんと、皮の着物の服までプレゼントされました。どんな思いで彼らを探し、話しかけ、服までプレゼントされたのでしょうか。罪を犯して呪われてしまったアダムとエバでさえ、神さまは愛されたのです。これと同じ愛で、今も神さまは皆さんを愛しておられます。このことを是非、知ってください。

救ってくださいる神さま

皆さんの家族や大切な友だちが病気になるたらどんな気持ちになりますか。「早く病気が治って欲しい」と思うでしょう。思うだけではなく、励ましの手紙やメールを送ったりしませんか。

神さまは、皆さんを愛されています。だからこそ、罪の暗闇から早く救われて欲しいと願っておられるのです。神さまは、その救いをはるか昔から、そう、アダムとエバが罪を犯した時から約束してくださっていたのです。

アダムとエバに神さまが皮の着物をプレゼントされま

した。皮を造るためには、動物が殺されなければなりません。愛である神さまは、罪を犯した彼らのために動物の血を流されたのです。これは、イエスさまが私たちの罪のために十字架で流された血のことを表しています。また、神さまが、悪魔に「彼がお前の頭を砕くであろう」と言われました。この「彼」とは、イエス・キリストのことです。イエスさまは、十字架で死なれました。しかし、死を撃ち破って三日目に復活されたのです。これが、神さまが約束された悪魔の頭を砕くことだったのです。神さまは、罪を犯して離れてしまった私たちを愛され、救うためにイエスさまを与えてくださったのです。

まとめ

罪深い私たちは、決して自分の努力では救われません。もし、罪の暗闇にずっといるなら心は腐り、幸せに暮らすこともできないのです。でも、イエスさまを救い主と信じるなら、罪の暗闇から脱出することができます。イエスさまを信じて罪から救われましょう！

♪主はわたしさえ♪ (ホ57)

聖書 ガラテヤ5・16～26 テーマ 御霊の実

序論

(高橋頼男)

キリストの救いを受けた者が目指すべき目標は、救いの成長でありキリスト信仰の円熟です。「ついに、私たちがみな、…完全におとなになって、キリストの満ち満ちた身だけにまで達するためです」(エペソ4・13、新改訳)とあるように、私たちがキリストの身だけにまで成長し、おとなになることです。その実質は御霊の実を結び身につけることです。そして、それを可能にしてくださいるのはご聖霊です。キリストのからだである教会の交わりと奉仕を通して、キリストにある者の人格に麗しい徳と品性の実を結ばせてくださるのはご聖霊のお働きによるのです。これらは「御霊の実」と言われています。私たちは律法や人間の修養や努力で、外から内を造ることによってこれらのものを身に付けることは出来ません。御霊は律法とは反対に、内から外に向かつてふさわしいかたちを生み出されます。命ある植物は自然に花を咲かせ実を結んでいきます。自分の弱さや罪深さを知らされる度に神の御前に出て悔い改め、

一つ一つ決断をもってご聖霊に明け渡して委ね、御霊の導きに従い続けていくのです。そのような日々の歩みにおいて、私たちの内と生活の中に時が来れば麗しい実が結ばれていくのです(詩篇1・3)。異教と偶像の国である日本において、キリストの証人として伝道しようとするとき、キリストの信仰が私たちの人格や品性にまで及ぶのでなければ説得力のある働きが続けることが出来ません。人々は、キリストが神であることが分からなくても、その人が本物のキリスト信仰を持っているかどうかについては見抜く力を持っています。また、多くの場合日本人は人を通して神を見ます。そして、神につまずく前に人につまずいてしまうのです。人を見ずに神を見て下さいねということ自体が、つまずきに似かりません。

ここには九つの「実」が出てきます。そして、それらは三つのグループに分けられます。

一、愛、喜び、平和(22)

これらは、神の前に私たちの内に結ばれる聖霊の実の現れです。神に愛されていることを知って神を愛し、神を喜び神に喜ばれるものとなり、神との平和が確立されて平安に溢れ、私たちの生活に愛、喜び、平和(平安)の実が結ば

れていきます。みことばと祈りを通して、聖霊による神との豊かな交わりに進みましょう。

二、寛容、慈愛、善意(22)

これらは、人と人との関係の中で私たちの内に結ばれる御霊の實の現れです。罪深い人間にとって人間関係はなかなか厄介で面倒です。しかし、私たちはキリストの体の一肢体として召されていることを覚え、他の肢体との係わりの中に生きることが大切です。キリストにある人間関係、神の家族とされた人々は、私たちが選んだ好きな人、居心地の良い人、愛しやすい人ではありません。神が私に押し付けられた人たちです。彼らと積極的にかかわりを持ち、交わり、共に奉仕に与りましょう。そこで、彼らに教えられ励まされ、主にある忍耐を学び、赦ゆるされる幸い赦すことの自由と解放を身につけていくのです。傷つけられた人が本当に癒いされるのは、傷つけた人によってです。キリストの共同体の中で聖霊により頼みつつ、キリストの愛を具現化、現実化させていただきましょう。

三、忠実、柔和、自制(22～23)

これらは、自分自身に結ばれてくる御霊の實の現れです。教えられやすく柔らかな服従に満ちたところこそ柔和で

す。終わりの時代は、自己中心で欲望追及の時代です。欲望にすぐ手が届く環境（インターネット等）がそこにあります。何につけても、セルフコントロールが決め手です。欲望にかられてしまう自己を制する自制、節制、ブレーキの利く御霊の人の特徴を備えさせていただきましょう。

これら九つのものは単数の「実」と言う言葉でまとめられています。つまり、これらはただ一つの「御霊の實」なのです。これらの御霊の實の諸相は、どれもみなキリストのうちに见られるものです。そして、キリストが御霊に満ちて歩まれたように、私たちもまた御霊のご支配を受け、御霊に導かれて歩む中に御霊の實が結ばれていくのです。神の前に、人間関係の中で、自分自身との付き合いにおいて、御霊に導かれ、御霊によって歩み、御霊によって進みましょう。

結論

聖霊の導きの中に生き、神との交わりの中で、御霊の實を結ぶ歩みをしていきましょう。

研究資料

(宮澤清志)

テキスト

16～17 御霊によって 佐竹明は、この個所を「霊の指揮下に」と訳している。「御霊」とは、「御子の霊」(4・6)である。「御霊によって」とは、御霊に支配された生活、自らを御霊の指揮下においた生活のことであり、御子の霊である聖霊に自らの全権をゆだねた生活、という意味であろう。また、**歩きなさい** とは、歩み続けるという継続の意味を持っている。**肉の欲** 「肉」とは、単なる「肉欲」ではない。肉とは、神から離れた人間の自己中心性と、そこから生じる具体的行動の原動力である。このような自己中心から生じる欲望は、御霊による生き方と対立する。「御霊」と「肉」とは互いに逆らいう行動原理なのである。

18 **律法の下** ここでの「律法」は「モーセの律法」というよりも、人間を縛る法則性、掟の代表としての「律法」であり、そのようなものにがんじがらめにされた人間の状態を意味する。人間は、「御霊に導かれる」時にのみ、この律法から解放され、自由にされることができ

のである。そしてこの自由は、キリストが私たちに与えてくださったものである(5・1)。

19 ここから21節までで、パウロは、肉の支配下で生じる生活の実際的な結果が列挙されている。このような個所は、他にはローマ1・29～31、Iコリント5・10～11等に述べられている。**不品行、汚れ、好色** この3つの悪徳は、性的な罪のリストである。昔も今も、性生活の乱れは目を覆うばかりだったのであるうか。この3つの項目については、明確な線引きはなかなか難しい。

20～21 **偶像礼拝、まじない** この2つのリストは、異教的な罪についての指摘である。**敵意、争い、そねみ、怒り、党派心、分裂、分派、ねたみ** 以上の8つのリストは道徳上の罪ということが出来る。これらの罪は、共同体の成立を根底から破壊する罪である。特に、最後の**ねたみ** はこれらの罪の総括的な位置づけであって、26節の結びの部分にも登場することから、パウロはガラテヤの諸教会の問題点を「**ねたみ**」に見ていることもうかがえる。また、これらの罪はすべて自己中心から由来する罪であることも特徴的なことである。**泥酔、宴楽** この2つの罪は、不摂生の罪としてあげられる。以前も

言ったように 第2回目のガラテヤ訪問の時(使徒18・23)であると思われる。**神の国をつぐことがない** 神の国の相続人(3・29)であるキリスト者は、これまで述べられてきた肉の行いから決別していなければならない(24)。

22〜23 以上の悪徳リストに引き続き、「御霊の実」のリストが語られる。肉の働き(19)の「働き」が複数形であるのに対して、「御霊の実」の「実」は単数形で書かれている。聖霊は、ある人には愛を、また別の人には喜びを、という実を与えられるのではない。御霊の実は一つであり、そしてこれから語られる徳目は一つひとつ切り離されるのではない。**愛** パウロがこの言葉を御霊の実の筆頭にあげたことに異議はない。Iコリント13章をはじめ、この書簡でも、人間に対するキリストの愛(2・20)、人間自身の愛(5・6)としても描かれている。**喜び、平和** この2つは人間の感情的なものと受け止められやすいが、これらは聖霊によって与えられる賜物である。**寛容** この語は「辛抱強さ・忍耐強さ」という感じを含んだ言葉である。**忠実**(ギ)ピステイス 人間の神に対する信仰という意味に訳される。しかし、この徳が

人間に向くならば、それは「誠実・忠実」という意味になる。**これらを否定する律法はない** 御霊によって歩む者の行いである「御霊の実」は、律法が要求したものと結果的には合致する。

24 **キリスト・イエスに属する者** キリストと共に死に、キリストと共によみがえらされた者を指す言葉であって(ローマ6・3〜11)、キリストがわたしに居り、わたしがキリストに居ると告白する者(ヨハネ15・4)である。**十字架につけてしまった** ここで用いられている動詞は、過去の成就された行動を指し示す言葉であり、回心、もしくはバプテスマの時を指すものと見られる。

25〜26 **もしわたしたちが御霊によって生きるのなら** わたしたちは御霊によって生きているのだから、という意味。**御霊によって進(む)** 「進む」とは、規則に従って、まっすぐに進む、という意味であり、御霊の原理に従ってまっすぐに行動する、ということを目指す。「生きる」が御霊の原理を指す言葉であるのに対して、「進む」とは具体的な行動を指している。

参考図書 佐竹明「ガラテヤ人への手紙」(現代新約注解全書)、藤原藤男「ガラテヤ書の研究」(聖書の研究社)

聖書

ガラテヤ5・16～26

タイトル

ペンテコステ・花の日

暗唱聖句

御霊の実は、愛、喜び、平和、寛容、慈愛、善意、忠実、柔和、自制であって、これらを否定する律法はない。

ガラテヤ5・22、23

目標

御霊の実を結ぶ者となる。

導入

(松浦みち子)

教会の記念日には三つの大切なものがあります。一つはクリスマス、これはイエス・キリストの誕生を祝う日ですね。二つはイースター、これはイエス・キリストの復活を記念する日です。三つはペンテコステ、これは教会の誕生日なのです。そのことを今日は学びましょう。

イエス様の約束の成就

イエス様は十字架にかかって死んだ後、三日目によみがえり、40日間にわたって弟子たちに現れ「わたしはよみがえって生きているよ」と姿を見せて下さいました。そして「あなたがたに聖霊が授けられるから、エルサレムで待っていないさい」と約束され、弟子たちははじめ多くの人々が見

ている前で、天に上っていかれました。イエス様の約束を信じて、弟子たちはエルサレムで、一日、二日、三日、四日と祈って待っていました。ちょうど十日を迎えたその時、朝9時ごろ、突然、ドドドーン、ピュー、ヒュルヒュルと、天から大風が吹いて来るような激しい音が鳴り響いたかと思うと、天から舌のような形をした聖霊が降ってきて、弟子たちひとりひとりの上にとどまりました。この記念日をペンテコステと呼ぶのです。イエス様が復活されて50日目のことでした。ギリシャ語で50番目のことをペンテコステと呼ぶからです。

聖霊によって歩きなさい

せっかく教会にきてイエス様を信じたのに、聖霊によって歩かないならば、良い実を結ぶことができません。私たちの内にある罪は、人に親切にしたいと思うそばから、自分がいちばん得をするかを考えさせます。悪魔は、私たちがわがままな心を起こすように働きかけ、神様から離れさせようとします。「肉」というのは、イエス様を信じない生まれつきのままの心のことです。人をねたんだり、友だちと喧嘩したり、イライラと怒りちらしたり、これらは自分勝手なわがままな心から出てきます。しかし、聖霊が心の

内に住んでくださるなら、私たちの悪い思いを追い出して、良いことをする力を与えて下さいます。生まれつきのままでは、悪い木が悪い実しか結ばないように、神様に喜ばれる行いではできません。しかし、聖霊が助けて下さると良い実を实らせることができるのです。

御霊の実を結ぼう！

御霊の実をひとつひとつ見ましよう。

愛——神様を愛し、人を愛することは一番大切です。誰に対しても、どんな時でも相手を大切にします。

喜び——神様を信じる心から出てくる喜びです。何か良い事があった時だけでなく、いつまでも続く喜びです。

平和——神様に守られ、どんなことにもゆるがさない心のやすらぎです。

寛容——神様は罪人の私たちを見捨てずに愛してくださいます。神様のように他の人をゆるす心のことです。

慈愛——親切な優しい、思いやりにあふれた心です。

善意——他の人に対して良いことをしようとする心です。

忠実——与えられた役目を、そのとおりにやり遂げることです。

柔和——すなおな心で、教えに従ってどんなふうにも変わ

ることができる心です。

自制——自分のことばかりを考える性質に打ち勝って、神様のために役立とうする心のことです。

このようにすばらしい御霊の実を結ぶものとなりましようね。

木は実によって知られる

柿の木を知っていますか？ 秋になると甘くておいしい実がなります。しかしどんなにおいしそうに見えても渋くてそのままでは食べられない実があります。そのように、その木がどんな木かは実によって知られるのです。

「実」というのは、私たちのする事、言う事です。「あの人なんか嫌い」と心の中で思っていると、その人の悪口を言ったり、意地悪をしてしまいます。

毎日、神様を信じて従って歩む子どもは、聖霊に助けられて良い実をいっぱいつけることができますよ。あなたの結ぶ実をみて、両親、友だちなどがイエス様ですばらしいね！と思うように、また、〇〇君のように教会に行ってみたいな！と思うようになれたらうれしいね。

♪みたまはやどつて♪ (ふ6)

聖書 マタイ5・43～48 テーマ 天の父の愛

序論

(福井文彦)

この箇所は、山上の説教の5・17～20の解説(適用)として、イエスが旧約の律法の中から引き出された六つの問題の最後です。その最後に、隣人愛を取り上げておられることは、決して無意味なことではありません。律法は、結局愛に尽きるからです。

一、敵を愛せよ

当時、律法学者やパリサイ人は、(「隣り人を愛し、敵を憎め」と教えていました。律法には「あなた自身のようにあなたの隣人を愛さなければならない」(レビ19・18)とはありますが、どこにも「自分の敵を憎め」という律法はないのです。

むしろ、「もし、あなたが敵の牛または、ろばの迷っているのに会う時は、必ずこれを彼の所に連れて行って、帰さなければならぬ」(出エジプト23・4～5)との規定がありました。ところが、律法学者やパリサイ人たちは、「隣人」を自分と同国人、つまり神の選民であるユダ

ヤ人に限定したのです。そして、ユダヤ人を愛し、異邦人は憎んでもよいと教えたのです。

しかし、イエスの「隣人」についての理解は全く違っていました。あの「よきサマリヤ人」のたとえ話によってもよくわかります。隣人とは人種差別を一切廃したすべての人であり、敵意とか好意を持っていることによって区別されないすべての人なのです。そのイエスが「敵を愛し、迫害する者のために祈れ」と教えられました。主が敵の中から特に「迫害者」を区別しておられるのは、他のどんな理由からの反対よりも、信仰のゆえになされる迫害が最も非情・苛酷だからです。

二、天の父の愛

イエスは(こうして、天にいますあなたがたの父の子となるためである)と言われました。私たちの敵をゆるし、迫害者のために祈ることによって、私たちが神の子とされるわけではありません。私たちは神の恵みとイエスへの信仰によって救われ、新しく生まれ変わり、神の子とされたのです。神の子は、愛なる天の父なる神に似るはずで、それゆえに、私たちが敵を愛する時、私たちはその愛の父にふさわしい者となるのです。

さらに、イエスは「天の父は、悪い者の上にも良い者の上にも、太陽をのぼらせ、正しい者にも、正しくない者にも、雨を降らして下さるからである」と言われました。父なる神は善人と悪人を区別できないようなお方ではありません。悪い者と良い者を区別なさった上で、公平にすべての人を取り扱っておられます。ここに神の公平が神の義と愛に基づいていることを知るのです。

イエスは、自分を十字架につけた人々を前に、「父よ、彼らをおゆるしください。彼らは何をしているのか、わからずにいるのです」(ルカ23・34)と祈られました。ここに敵をゆるし、迫害する者のために祈られたイエスの愛を見ることが出来ます。主は私たち罪人のために十字架上で死んでくださったのであり、それはイエスをこの地上に遣わしてくださった神の愛なのです(ローマ5・8)。

三、人を愛する者

イエスは「あなたがたが自分を愛する者を愛したからとて、なんの報いがあるのか。そのようなことは取税人でもするではないか」と言われました。これは、どんなモラルの欠けた人でも自分を愛してくれる人を愛するこ

とはできるのだ、ということです。しかし、私たちは隣人を愛することはなかなかできません。また、他人に害悪を与えられると黙っていられず、復讐しようという気持ちで湧いてきます。

その私たちに對して、イエスは「それだから、あなたがたの父が完全であられるように、あなたがたも完全な者となりなさい」と語られました。この完全は、知恵や力の完全でなく、愛における完全、全き愛のことです。この完全をきよめ(聖潔)と言います。「敵を愛し、迫害する者のために祈れ」るのは神の愛によるのであり、キリストの心によるのであって、聖霊によって神の愛が心に注がれて初めてできることです(ローマ5・5)。そして愛の領域で完全になるとは、混じりけのない、不平等や不公平のない、透明純粋な愛をもって生活し行動することができるようになることです。

結論

神と交わり、イエスの血によってきよめられ(Ⅰヨハネ1・7)、聖霊によって神の愛を注がれ、愛が全うできる者を目指しましょう。

研究資料

(宮澤清志)

今日から三つの主日にわたって「山上の説教」の前半部分を取り上げる。特に今日が「父の日」であることから聖書の箇所としては前後するが、山上の説教の最初でもあるので、緒論的なことに触れておきたい。

マタイは、その福音書の中で、イエスが教えたことを5つの箇所にまとめた。その中の一つが「山上の説教」である(あとの4つは10章、13章、18章、24〜25章である)。マタイは、大宣教命令をもってこの福音書を締めくくる。マタイは、イエスの大宣教命令の中の「あなたがたに命じておいた小さいこと」(28・20)を、この5つの箇所に「イエスの教え」という形で集めたのである。

さて、この箇所は、21節から始まる一連の流れの中にある。これは、「『』と言われていたことは、あなたがたの聞いているところである」(21、27、33、38、43)と、律法の伝承を取り上げて、「しかし、わたしはあなたがたに言う」と、その伝承を否定し、イエスの新しい光の中でこの律法を解釈して見せたのである。

テキスト

43 『隣り人を愛し、敵を憎め』 前半部分の「隣り人を愛し」という言葉については、レビ19・18に言及されている。この戒めは、主イエスにとって、神に対する愛の戒めとともに最も重要な戒めとされている(22・34以下)。しかし、後半部分の「敵を憎め」という記述は、聖書をはじめ、ユダヤ教文献のどこにも見いだされない。しかし、ユダヤ人たちに「敵を憎めとあなたがたは聞いています」と語ったイエスの言葉に対して、群衆やユダヤ人たちは反論していない。また、当時のユダヤ人社会の教えや文献からして「隣人」とは、同胞であるユダヤ人だけを指すと解釈し、他のあらゆる民族を、異邦人であり敵であると思え、と解釈できるようである。

44 イエスがその御国の民に命じられた言葉である。敵直訳は「あなたがたの敵」であるが、「あなたがたから見の敵」というよりはむしろ「あなたがたを敵と見る人々」という意味であろう。御国の民には「敵」はいない。いるのは自分たちを「敵」と見る人々である。愛し感情的なものであるというよりは、むしろ強い意志を伴ったものである。迫害する者のために折れ ここに用

いられている二つの動詞は現在形で書かれている。ここでは、一般論としての命令ではなく、具体的な人々を想定して語っているようである。

45 こうして この接続の言葉と以前からのつながりによれば、敵への愛や迫害に対する祈りの結果神の子とされる、かのような誤解を抱く恐れもある。しかし、そうではない。むしろ、この「こうして」とは結果を表す。神の子とされた者は、その結果、そのしるしとして敵への愛や迫害者に対する祈りへと導かれる、というのである。天の父は、悪い者の上にも良い者の上にも、太陽をのぼらせ、正しい者にも正しくない者にも、雨を降らして下さるからである。人間に対する神の働きは、人間の何かによって条件付けられるのではない。しかし、このことはユダヤ人たちには信じがたいことであった。なぜなら、契約の民であるユダヤ人は、神から特別扱いされていると信じていたからである。それは同時に、因果応報という考えを根底に持つ日本人と日本人キリスト者に対するメッセージでもあろう。

46 47 ここに「取税人」と「異邦人」とが道徳的に一段低い存在として例示されている。これは、もちろんイ

エスご自身が彼らを軽蔑したというのではなく、当時のユダヤ人の間における常識的な見解を採用したのであろう。あいさつ 単に挨拶を交わすというのではなく、挨拶をする相手に神からの祝福を祈る祈りが含まれる。

48 この箇所は、第一義的には今回取り上げた43節以降の結論部分といえることができる。しかし、それ以上にこの箇所は21節以降の締めくくりのみ言葉として読むことができる。その鍵となる言葉は「完全」という言葉である。ちなみにこの言葉は、並行記事のルカ6・36では「慈悲深い」と訳されている。しかし、マタイがここでいう「完全」とは、マタイの文脈から理解すると、人を差別することなく愛する、という意味に解することができる。この箇所は「愛」の対象としての「隣人」を定義づけているのである。その隣人に対して45節にあるように、公平に愛を注ぐという意味での「完全」を意味しているのである。なぜならば、それは「天の父」がそうであるからである。

参考図書 中沢啓介「マタイの福音書註解」（恵友書房）、D・M・ロイドジョンス「山上の説教」（いのちのことば社）

聖書

マタイ5・43～48

タイトル

天のお父様はどんな方？

暗唱聖句

天の父は、悪い者の上にも良い者の上にも、太陽をのぼらせ、正しい者にも正しくない者にも、雨を降らして下さるからである。

マタイ5・45

目標

天の父なる神の愛を知り、どんな人をも愛する者となる。

導入

(松浦みち子)

今日は父の日ですが、あなたのお父さんはどんな方ですか？ 皆さんの中には、お父さんのいない人もいるかもしれませんね。二歳の時、お父さんを病気で亡くした男の子がいます。お父さんの顔も、肌の温もりも何にも覚えていません。おばあさん、お母さん、お姉さんと女三人の中で育ちました。大きくなった時、ふと、お姉さんの日記を引き出しの中から見つけたので、そおと盗み見しました。すると、「お父さま、お父さま」と書かれていてビックリしました。「うちにはお父さんはいないのに。お姉ちゃんはどうしてこんなこと書いているんだろう？」不思議でたま

りませんでした。怒られることを覚悟で、恐る恐る聞いてみると、「私ね、教会に行っているんよ。お父さまってね、天の神様のことよ」と教えてくれました。その後、彼は教会に導かれ、天のお父さまの愛と恵みを知って、父のいないさびしい人生から解放され、すばらしい天の父の愛を伝える牧師になったのです。

天のお父さまってどんな方？

聖書には、悪い者の上にも良い者の上にも太陽をのぼらせる方、正しい者にも正しくない者にも雨を降らして下さる方、と書かれています。ですから、天のお父さまは、悪い者にも良い者にも公平に恵みを下さる方であることがわかります。さらに、敵対する者をも愛する完全な方だと言われています。しかし、もつとはつきりと天のお父さまを知ることはできるでしょうか？ できます！ それはイエス様を通してです。「神を見た者はまだひとりもない。ただ父のふところにいるひとり子なる神だけが、神をあらわしたのである」(ヨハネ1・18)。そして、そのひとり子 はめぐみとまことに満ちていたと言われているので、天のお父さまも、きっと、そのようなお方なのでしょうね。

ひつりイエス様に注目しよう！

父なる神様をあらわすために、天から遣わされたイエス様に目を注ぎましょう。イエス様は目に見えない神様に見える形であらわすために、その生涯の全てをもって完全に従われたのです。ですから、イエス様を見ると、父なる神様が、どんな方であるか、その行動、ことば、生活の全てをもって知ることができるのです。

①馬小屋で誕生されたイエス様は、どんな人でも近づくことができる神様の愛のあらわれです。②貧しい大工の家で育たれたイエス様の服は、継ぎはぎだらけの服だったのでしょうか。服のやぶれを繕うのに「新しい布をあてては、古い布が破れてしまうよ」と、お話になりましたが、貧しい生活の苦しさや悩みを経験し、人としての悲しみや痛みがわかる方でした。ですから、神様はどんな悩みにも理解を示して慰めることができる方だとわかります。③孤独な人、病気に苦しむ人に寄り添って食事する暇も、寝る暇もないほど働かれました。神様はやさしく、助けの必要な人を支えてくださる方だとわかります。④最後には、十字架にかけられ殺されましたが、自分を十字架につけた人々を前に「父よ、彼らをおゆるしてください。彼らは何をして

いるのか、わからずにいるのです」と祈られました。そして、人間の罪のために、犠牲の小羊となって身代わりとなって死んでくださいました。ここに神様の大きな愛があらわれていますね。

父なる神様の愛

ある財産家のところに、二人の息子がいました。兄ははじめに働く人でしたが、弟は「もっと楽しい暮らしがしてえなあ」と考え、お父さんの所にいつてこう言いました。「お父さん、僕に遺産の半分をください。僕は町へ出てひと儲けしたいのです」。お父さんは、彼の願いを聞き入れ、彼は遺産をお金にして町へ出かけて行きました。ところが、誘惑に負けて、遊んで暮らし、たくさんのお金もすっかりかんになりました。食べるのにも困って、豚がブーブー食べている餌を眺めるばかりでした。そんな時、一大決心をしてお父さんのところに帰るのです。お父さんは、身も心もボロボロになった息子を、よく帰ってきたと言って、優しく迎え入れてくれたのです。

天のお父様も大きな愛をもって、信じる者を受け入れ導いてくださるお方です。従って歩みましょうね。

♪父なる御神に♪（新聖歌449）

聖書 マタイ5・1～12 テーマ さいわいな人

序論

(高橋頼男)

幸いを求めない人はいません。誰もが幸いになりたいと願い、自分の思い描く幸いを得るために懸命です。今日まで著名な「幸福論」がいくつも世に出て、人間の幸福について論じられ、問われてきました。旧約聖書の詩編にも有名な幸い論が出てきます。(詩篇1・1、詩篇32・1～2)

ここにはイエス・キリストの幸い論があります。しかし、主イエスの幸い論は、万民に語りかける教訓や垂訓、教えの類いではありません、それは明確な説教なのです。イエス様は、ここで〈弟子たち〉と〈群衆〉に向かって八つの幸いについて語っておられます。イエス様の幸福論はまことにユニークです。人が考える幸い、この世の期待する幸いとは全く違っており、まさに真逆をいくものです。世の基準ではとても測れず、むしろ不幸と思われることが幸いのしるしであるかのようなのです。その理由は、主はこの世ではなく神の国の幸い、神の国の民とされた者の幸いを語っておられるからです。それは人間的幸福(幸福感・満

足感)ではなく、神による祝福です。この幸いは主の弟子たちへの説教として語られています。神の国に生きる彼らの幸いがあるかが語られています。また、主は群衆に向かって語っておられます。真の幸いについて改めて問い直し、深く考え、日ごろ漠然と考えている幸いがいかにもろく根拠の乏しいものであるかということに気付かせ、彼らの目を開き、神の国の価値観、人生観、世界観へと導くための説教なのです。

一、心の貧しい者の幸い(5)

最初に出て来る幸いは、心の貧しい者の幸いです。心の貧しさの幸いは、主イエスの語られる幸いの原型です。まず、心の貧しい者こそ幸いな人なのです。愛の無い、自己中心な人というのではなく、むしろ神の前にへりくだった心砕かれた人のことです。他の一切のものによらず、神のみに依存し神に信頼する人です。なぜ、「心の貧しい者」が幸せなのでしょう。それは天の御国が、すでにその人のものになっているからです。「天の国」、「神の国」とは支配や統治、主権のことを意味し、その支配や統治が及ぶ領土、国をさします。「神の国」はすなわち、神による支配、統治のことです。砕かれた心でへりくだって神に全く信頼して

いる〈このころの貧しい人〉は、すでに神による恵みのご支配の中に生かされているのです。

二、悲しむ者、柔和な者、義に飢えかわく者、あわれみ深い者、心の清い者、平和を作る者の幸い

(4-9)

悲しむ者がなぜ幸いなのでしょう。それは真摯に自分の罪を神の前に認め、嘆き悲しむ者を、神は必ず豊かに慰めてくださるからです。「神のみこころに添うた悲しみは、悔いのない救を得させる悔改めに導き」(Ⅱコリント7・10)ます。柔和な者がなぜ幸いなのでしょう。それは耐え忍ぶことによって、〈地を受けつぐ〉すなわち、神の約束と賜物を得ることができ、御子の御姿に似た者とされるからです(ローマ8・29)。義に飢え渴く者がなぜ幸いなのでしょう。それは、神との正しい関係をひたすら求める者を、神は必ず義と認め、神のみ心になう歩みができるようにしてくださるからです。あわれみ深い人たちは神の義に生き、他者へのあわれみを大切にする人たちです。このころの清い者たちは、神に対して二心のない者たちです。平和を造る者たちは、神との平和によって、人との関係において平和を作り出す人たちです。シャロームを生み出す者たちで、彼

らこそ神の子と呼ばれるのです。

三、迫害される者の幸い(10-12)

主イエスは、〈義のために迫害されてきた人たちは、さいわい〉だと言われ、〈喜び、よろこべ〉とまで言われます。神に従う者が苦しみと迫害を経験することは当然のことなのです。しかも、そのことを喜びなさいと言われます。それは、苦難こそ神に従う者のしるしであり、神の国(神のご支配)がその人のものになっている証拠なのだからです。さらに、その時私たちは「地の塩、世の光」(13-14)としての使命を果たすことが出来るのです。そして、〈天においてあなたがたの受ける報いは大きい〉と断言していただきます。だから大いに喜ぶことができるのです。

結論

「なんと幸いな人たちでしょう、あなたがたは…」と言われる主イエスのことばは、この世ではなく神の国の幸い、神の国の民とされた者の幸いを語っておられます。神の国に生きる者とされている幸いを知り、恵みによって積極的にこの幸いに生きる者とされましょう。

研究資料

(宮澤清志)

テキスト

1 群衆 マタイ4・25に描かれた「おびただしい群衆」を指すものと思われる。イエスは、弟子たちばかりでなく、イエスに近寄ってくる群衆たちにも同じように神の言葉を語られた。山 この群衆を見て、イエスがなぜ「山」に登られたのかは記されていない。しかし、イエスにとって「山」とは、その節目節目において登場する重要な場所である(マタイ4・8、14・23、15・29、17・1、28・16他)。

3 12 ここに、本日の主題である「幸いの道」が示される。さいわい(ギ)マカリオスとは、単なる「幸せ」という意味とは異なる。この言葉は「神に祝福されている」という意味の言葉であり、それは、時間の変化、状況の変化などによって消滅したり薄められたりする類の幸福ではなく、何によっても消されることなく、またこの世の何によっても取り去られることのない神の祝福の事実である。

また、この箇所は、一般に「八福の教え」とも呼ばれ

ている(11、12節を入れると9つある)。しかし、この「幸い」は、それぞれが切り離されて存在するのではなく、一つの「幸い」に見られる八つの側面という方がよりふさわしい。

3 こころの貧しい人たち この「貧しい」とは、徹底的に貧しい人のことをいう。「心の碎けた者」「たましいの悔いくずおれた者」(詩篇34・18)に近い状態である。自分の内側により頼むべき何物をもっていない者のことである。このような者をこそ、神はご自分の民として迎え入れられるのである。

4 悲しんでいる人たち ここでは、何を、どう悲しんでいるのかは説明されていない。しかし、聖書に示される「悲しみ」とは、「この世が神を失っていること」に起源を発している。神に反逆しているこの世界や、罪に沈んでいる人間に対する「悲しみ」である。このような者たちに必要なものは「慰め^{なぐさ}」である。

5 柔和な人たち この言葉は、詩篇37・11の七十人訳聖書からの引用であるが、この詩篇では、柔和な人の特徴をいくつかあげている(怒りをやめ、憤りを捨てること。耐え忍ぶこと。主を待ち望むこと。等)。何よりも

主イエスこそが「柔和なおかた」と呼ばれている（マタイ21・5）。そのような者たちに用意されているのは「新しい地」（Ⅱペテロ3・13等）である。

6 義に飢えかわいている人たち 義とは、神のご性質の中心をなす言葉であり、神が人のために備えられたものでもある。「救い」と置き換えてもいい言葉でもある。ここで、義に飢えかわくとは、神がキリストを通して人間に備えられる救いを熱心に求める人のことである。神はそのような人に救いを満たしてくださいさるのである。

7 あわれみ深い人たち あわれみとは「はらわたまで痛んで下さる神の愛」であって、他の人に対する具体的な行動へとつながる愛である。単なる同情や感傷ではなく、行動を伴うのである。そのようなあわれみをもって隣人に接する者は、あわれみを受けるのである。

8 心の清い人たち 「清い」という言葉は混じりけがないという意味を持つ。人間の最も奥深い部分まで純粹であることをさす。同時に「清い」とは「分かれたれない」という意味も併せ持つ言葉であり、「二心」でないことを指す（ヤコブ4・8）。そのような者に与えられた約束は「神を見る」であって、直接神とお会いするという約束で

ある（Ⅰコリント13・12）。

9 平和をつくり出す人たち 平和とは「すべての被造物が、創造者との関係およびお互いの関係において、それぞれにふさわしい位置におかれること」である。人は、イエス・キリストを通して与えられる神の和解を受け入れ、和解の福音を携えて積極的に遣わされるのである（Ⅱコリント5・20）。

10 義のために迫害されてきた人たち 「義」とは、神が御国の民のために備えられた救いのみ業を指す。ペテロも「万一義のために苦しむようなことがあっても、あなたがたはさいわいである」（Ⅰペテロ3・14）と語っている。神はそのような人たちに、神の御国を約束されているのである。

11・12 この箇所は10節の展開である。特に、これまで「彼らは」と三人称で述べられていたものが、この節では「あなたがたは」と二人称となっており、弟子たちがやがて「ののしり」「迫害」「悪口」に直面するであろうことを率直に述べる。しかもそれは「わたし（キリスト）のため」（11）のものである。

参考図書 6月15日分に同じ。

聖書

マタイ5・1～12

タイトル
暗唱聖句

ホンマモノの幸せとは？
 こころの貧しい人たちは、さいわいである、天国は彼らのものである。

マタイ5・3

目 標

真に幸いな生涯の秘訣を知る。

導入

(松浦みち子)

あるテレビのコマーシャルで「幸せって何だっけ、何だっけ」と歌っていましたが、胸に手を当てる私たちも「何だっけ」と一緒に考えてみませんか？ みなさんはどんな時に「うれしいなあ、しあわせだなあ」と思いますか？ お誕生日に欲しかった素敵なプレゼントをもらった時、テストで100点をとってお母さんに褒められた時、家族で海外に旅行した時など、いろいろあるでしょう。確かに、やった！って、最高に幸せな気持ちになりますね。でも、そんなに最高の幸せも時間がたつといつのまにかなくなってしまういませんか？ いつまでもなくならない幸せってあるでしょうか。

山上での説教

イエス様はある日、山に登って弟子たちにお話をされました。イエス様は神様の子ですから病氣の人や多くの悩みに苦しんでいる人たちを次々、癒してあげました。そんなイエス様の噂を聞いて、東から西から、北から南からと大勢の人が押し寄せてきます。人々の関心事は癒しのみで、イエス様が神の御国の福音を伝えようとしても聞く耳を持ちません。また、弟子たちも「おれたちは有名人イエス様の弟子なんだぞ！」という、人気や名誉に有頂天になっている姿に、やがて同じ人々から迫害されることになるのを知らせなければならなかったのです。

本当の幸福とは？

イエス様はお話しの中で「さいわいである」と9回も語っておられます。これを3つに分けることができます。一つ目は「心の貧しい人」「悲しんでいる人」「柔和な人」、二つ目は「義に飢えかわいている人」「あわれみ深い人」「心の清い人」、三つ目は「平和をつくり出す人」「義のために迫害されてきた人」「わたしのためにのしられたり、迫害されたり、悪口を言われたりする人」。みなさいわいだと言われたのです。「えー、どうして？」「ちよっと、おかしい

よ」と思うかもしれませんね。だって、大きな家に住んだり、お金をたくさん持って何でも買える人、丈夫な体で元気に何でもできる人、そっちの方がぜったい幸せに決まっている、と思いますね。けれども、お金は使えばいつかはなくなってしまうし、どんなに良い物でも時間がたつと変わってしまいます。丈夫な体もいつか年をとって弱っていきます。イエス様の教えてくださる幸せとはどんなものでしょう。

「心の貧しい人」とは、自分が神様の前では、小さな、何もできない弱い者であることを知っている人のことです。「悲しんでいる人」とは、そういう自分を悲しく思っている人のことです。なぜ、このような人が幸せかというと、自分の力ではどうしようもないとわかって「神様、助けて下さい」と神様をお願いするからです。神様は、こういう人に知らんぷりをされません。必ず祈りにこたえて、慰め（なぐさ）ましてくださるのです。だから、心の貧しい人はさいわいなのです。また、イエス様を信じているということでも、みんなから悪口いわれたり、ひどい目にあったりされている人は、さいわいだと言われます。なぜならこの人はイエス様のために苦しみを受けているからです。その人は、必

ず天国に迎え入れられて、神様からたくさんの恵みを頂くことができるからです。イエス様の教えて下さった幸せは、いつまでも変わらないホンモノであり、天国の約束に裏付けられたものであるのですね。

本当の幸せに生きた人

みなさんは、ヘレン・ケラーという人を知っていますか。この人は、赤ちゃんの時に重い病気にかかり、目も耳も悪くなり、言葉もしゃべれなくなっていました。かわいそうに思った両親は、とても甘やかして育てました。その結果、ヘレンは、気に入らないことがあるとすぐに癇癇（かんかん）を起して物を投げつけたりする子になってしまいました。そんなある日、サリバンという若い女の先生が家庭教師としてやってきて、ヘレンにすなおに従うことを教えたのです。そして、言葉を教え、やがて点字の聖書を読めるようになりました。ヘレンは、イエス様の十字架を信じれば、罪ゆるされて、神の子になることを知り、イエス様に従うことを決心しました。神様に従う時、本当の幸福があることがわかったのです。そしてヘレンは、生涯をかけて、その幸せを多くの人にあかしする人となったのです。

♪よろこびはわがこころに♪（ホ132）

聖書 マタイ5・13・16 テーマ 地の塩・世の光

序論

(金井信生)

イエスはクリスチャンを「地の塩、世の光」として評価し、また期待しておられます。

一、キリストが喜びとし誇りとして存在

イエスは弟子たちに「地の塩、世の光」になりなさいと言われたのではなく、すでに「地の塩、世の光である」とおっしゃられました。これはイエスの言葉に従う私たちを、大いに尊んでおられる言葉です。

「塩(ソルト)」が語源となって「給料(サラリー)」という言葉ができたように、昔から塩は貴重なものでした。また「光」も庶民は特別なときでなければ手にしません。聖書でも花婿を迎えるときや貴重な物を探すとき、わざわざ「あかりを手にして、つけて」と記しているほです。今のように塩も光も当たり前の時代ではありません。

塩として光としてどう生きるべきか考える前に、素直

にまず、キリストが私をすでに認めてくださり、こんなに尊んでくださっていることを喜びましょう。

そして、どうでもいい者ではなく、この世に必要な存在として、自分に何が期待され、託されているのか、主の言葉に聞き従いましょう。

二、地の塩の存在

昔から「塩」が尊ばれたのは、塩にしかできない働きがあるからです。

まず、食べ物を保存し、腐敗から守ります。経験的に、塩には汚れたものを退け、清く保つことが知られており、魚や肉や野菜を保存し、冬や不漁不作など、収穫の無い時に備えることができました。

クリスチャンも、この世を清く保つために置かれている存在です。それも「地の塩」とあるように、目立つ飾り物ではなく、周囲に溶け込んで自分の姿を失いながら、なお塩気を失わないでいるのです。神から離れて汚れたり乱れやすいこの世にあって、流されることなく、神の清さ正しさに立っていくことです。

また、塩は食べ物に味をつけます。世界の歴史の中で、

文学や芸術、医療や福祉、教育や科学など、さまざまな分野にクリスチャンが大きな影響を与えてきました。人の持つ能力や賜物を引き出して、世の中を良くしていく、人生に彩りを与えることができるのです。

三、輝いて生きる世の光

「光」もなくてはならない存在です。

神ははじめに「光」を造り、今も世界を照らしておられます。ただ、神の光が届いていないのが、人の心の中であり、この世の中です。

イエスは「わたしは世の光である」(ヨハネ8・12)と名乗られます。神の存在を思い起こさせ、神のもとに立ち帰らせるための「命の光」です。か細い光、仮の光ではない、永遠にわたる光の源そのものがキリストです。

この方からクリスチャンは、「世の光」として任命されました。肝心な時に光らなかつたり、隠れこんでしまつたら、光としての役割を果たすことができません。

自分では光ることができない私たちですが、内にキリストをもち、またキリストの光に照らされ続けて、命の光を世に輝かせる者とならせていただいています。その

ために、日々言葉に養われ、育てられていくのです。

イエスは、私たちを世の光として「山の上にある」、「燭台の上において」と表現されました。光が大きいか小さいかよりも、ゆるがない大きな存在に支えられているから、持っている価値を発揮することができるのです。

塩氣を与えてくださる神、私たちを命の光をもつて照らし、この世に掲げてくださっている主がおられます。塩や光は、この大きな存在を世に示すためです。(人々があなたがたのよいおこないを見て、天にいますあなたがたの父をあがめるように) なるために、私たちは先に主の救いにあずかりました。主に尊ばれ、用いられていることを喜び、私が今ここに生かされているのは、主から託された使命を果たすためですと、喜んで主の恵みに歩みましょう。

結論

地の塩、世の光と評価されていることを喜び、主の恵みによつてますますその務めを果たしていこう。

研究資料

(宮澤清志)

主イエスから「幸いだ」と語られる御国の民は、この世においてどのような存在であるかを明らかにするために、イエスはこの教えを語られた。

テキスト

13 あなたがたは、地の塩である この語は、他の並行記事には登場しない、マタイ特有の言葉である。ギリシア語の語順も、あなたがたは が冒頭に置かれており、強調して「あなたがたこそ」と訳すべき言葉である。また、地の塩である という言葉にも注目したい。これは「地の塩にならなさい」という命令ではなく、約束の言葉でもない。天の御国の民は、既に、塩になっているのである。もし塩のききめがなくなったら： この文は、並行記事であるマルコ9・50とルカ14・34―35にも登場する。ききめがなくなるとは、直訳すれば、「愚かになる」という意味である。一般的に、塩には「腐敗を防ぐ、清める、味つけをする」等、様々な効能があるとされている。塩には少なくとも11の役割があると指摘する学者もいるが、ことさらにその中のどれかを強調し、聖書に読

み込むことはあまり意味がない。この箇所はそのすべてを網羅すると考えられる。同時に塩には保存作用がある。キリスト者もこの世界が腐敗して破滅するのを防ぐ働きが求められているといえる。しかし、もしこの塩が、塩としての価値がなくなり、ただの塊となってしまったら、ただ外に捨てられて人々に踏みつけられる、すなわち役に立たないものとして破棄される、というのである。

14 あなたがたは、世の光である 前節同様、ここでもあなたがた が強調された文体となっている。世の光 ここでいう「世の光」とは、何だろうか。マタイの語る「世の光」とは、この山上の説教の直前の「暗黒の中に住んでいる民は大いなる光を見、死の地、死の陰に住んでいる人々に、光がのぼった」(4・16)のみ言葉のイメージを持っているのではないかと考えられる。そしてこのイザヤ書のみ言葉は、イエスによって成就したと考えているのであろう。とすれば、マタイの「世の光」の理解は、まず第一には、本来イエスご自身を指す言葉ではないかと考えられる。しかし、マタイはここで「あなたがたは」と付け加える。それは、キリスト者は、何らかの努力によって、自らが「世の光」となるのではないとい

うことを示すのである。キリスト者が「世の光」であるのは、この「わたしは世の光である」(ヨハネ8・12)と語られるお方を内に宿すことによって可能となるのである。

15 この箇所については、並行記事として、マルコ4・21、ルカ8・16、11・33がある。柵の下におく 当時、ランプを消す時は、吹き消すと煙つてくさいから、柵をかぶせて静かに消したそうである。このことから、通常考えられている「愚行」という面と、「輝いている火は消してはならない」という両面が考えられる。いずれにしても、キリストの火をいただいている私たち自らが、その火を消してはならないことを語っている。

16 あなたがたの光 ここでの「光」とは、自らを「光」と語られた(ヨハネ8・12)内住のキリストのことである。キリストを信じ受け入れた時、キリストの光を内に宿するのである。輝かし 日本語のもつ響きからは、人間の側でがんばって良い行いをするという意味に理解できそうであるが、より原文にふさわしく訳すと「光は輝けよ」「光に輝いていただけ」という訳となる。ここで大切なことは、人間の側では自然に輝く光を覆い隠してはな

らない、ということである。あなたがたのよいおこないキリスト者の善行は、内に住んでおられるキリストが輝くことによってたらされる。よい(ギ)カロス) とは、単に良いということだけではなく、美しさ、魅力的、といったものも包含しており、多くの人々を引きつけるものである。それが御国の民の態度や行動である。天にいますあなたがたの父をあがめるように キリスト者は、この世から選び分かれた者である。それは、神の光をこの世に輝かすためである。キリスト者が神の光を輝かすのは、「天におられるあなたがたの父」があがめられるためなのである。

ところでイエスは同じ山上の説教の中で「人前で善行をしないように」(6・1、新改訳)と教えている。このことは、この箇所において語られた言葉と矛盾するのではないかと思われる方もいるのではないだろうか。しかし、両者の間には本質的な相違が存在する。6・1の教えは「人に見られるため」すなわち自分自身に栄光を帰するための行為であるのに対して、この箇所は神に栄光を帰するための行為なのである。

参考図書 6月15日分に同じ。

聖書

マタイ5・13〜16

タイトル

地の塩、世の光とされた恵み

暗唱聖句

あなたがたは世の光である。

目標

地の塩、世の光として生きる。

マタイ5・14

導入

(飯田勝彦)

6月から7月は、梅雨の時期ですね。梅雨が「好きだ!」という人がいますか。「雨が降りジメジメしていて嫌だ」という人が多いのではないでしょうか。早く、空がスカッと晴れ、夏の太陽の日差しを浴びたいですね。でも、皆さんの心は、梅雨空のように曇り、ジメジメ、ジトジトしていませんか。

先週に続き、今日の箇所もイエス様が弟子たちを中心に大勢の人たちに大切なお話をされたところです。今日、イエスさまは皆さんに素晴らしい生き方を教えてくださいます。

あなたは地の塩です

塩は、私たちにとって、とても身近な物ですね。イエ

スさまは、私たちが理解できるように生活の中にある物から、よくお話をされました。

イエスさまは、弟子たちに「あなたがたは地の塩です」と言われました。今朝、皆さんにも同じように言われます。これはどういう意味でしょうか。

塩は、私たちの生活には欠かすことのできない物で毎日たべています。でも、塩だけを食べる人はいないでしょう。「今日の朝ご飯は塩だったよ」という人、聞いたことありますか。

塩は多くの場合、料理の調味料などに使われます。塩気のない料理は、食べても美味しくありません。皆さんも自分の好みで塩を振ることがあるでしょう。でも、塩がメインではありませんね。塩は丁度良い塩加減になって初めて、料理を引き立たせるのです。塩は、縁の下での力持ちです。ですから塩はかたまりではなく、混ぜる物の中に溶けてこそ、その力を発揮します。

また、梅干や漬物、お正月で食べるかずの子などは、長くもつ保存食です。保存食には、たくさん塩が使われています。塩は物を腐ることから守る効果があるからです。

イエスさまを信じるクリスチャンは地の塩として素晴らしい役割が与えられています。それは、生活の中で周りの人たちの中に溶け込み、その人の良い所を引き出していくのです。皆さんのイエス様の愛に生かされる姿を通して、クラスにいじめがなくなり、みんなが仲良くなっていくなれば嬉しいですね。それこそ、腐敗を防ぐ塩の役割です。

イエスさまは、あなたに素晴らしい人生を約束してくださっています。

あなたは世の光です

イエスさまは「あなたがたは世の光です」と言われました。もし、光がなかったらどうでしょうか。周りは真っ暗で、学校や教会に行くのも大変です。

でも、光があれば歩くこともぶつかることもありません。光があれば洗濯物はよく乾くし、電気も作れます。また、光は、植物が光合成をするためには必要です。私たちも光がなければ、健康でいることはできません。

そのように光とは、私たちの生活には欠かせないものです。でも、光は私たちの心にも必要です。真っ暗な心

だと苦しく、人をも傷つけ暗い人生を送らなければなりません。私たちの心を照らし、救いへと導いてくださるのがイエスさまです。イエスさまは「わたしは世の光です」と言われました。光であるイエスさまを心に迎えている人は、人々に希望と救いを指し示す、永遠の光を持つて歩むことができます。私たちは、光であるイエスさまを多くの人たちの所にお連れする、世の光とされています。私たちを通して、安心し希望が与えられる人がいるなら、何と幸いなことでしょうか。

まとめ

今、皆さんも学校やテレビなどで、悲しく辛いニュースをいっぱい聞くでしょう。でも、イエスさまは、皆さんを、人を生かし希望を与える、地の塩、世の光として用いてくださるのです。素晴らしい人生をイエスさまが与えてくださっていることを感謝しながら歩みましょう。

そして、神さまは、皆さんを通して素晴らしい神さまを証する者として用いて下さるのです。

♪ひかりひかり♪ (こ52、ホ109、ふ83)

牧羊ひろば



待望教会 教会学校

●待望教会の沿革

待望教会は、一九四一年（昭和16年）に森山論師によって創立されました。その前身は、一九三二年（昭和7年）森山論師の召命により塩川町大字遠田にあるご自宅を開放しての宣教が始められたことによるもので、現在の会津若松市大町には一九九一年に移転し今年創立73年を迎えます。

●会津の文化背景と信仰継承

創立当初から教会学校の働きには力を入れ、子どもたちへの信仰継承も確実になされてきました。しかし、会津には大きな産業もなく観光が中心で、昨年NHK大河ドラマ「八重の桜」で一躍脚光を浴びましたが、一年の三分の一は雪に閉ざされています。また会津にある唯一の「会津大学」も昨年開学20周年を迎えたばかりです。そのため、若い人々の殆どが関東の大学に進み、そのまま就職、結婚、永住という道を辿ることが多く、益々少

子高齢化が進んでいます。昨年の敬老祝福者（75歳以上）も現住会員52名中19名にも及びます。逆に教会学校の子どもの礼拝出席は昨年7月より皆無に等しい状態で、ただクリスマスチャン家庭の子ども（小学4年）一人が午前十時半の礼拝に親と出席し、特別行事にのみ出席するのが現状です。このように「都会へ若者を送り出す教会」という道を辿らざるを得ない状況にあります。更に東日本大震災による原発の影響もあると思います。そんな中、一人の教師が「今迄は教会学校に多くの子どもたちを！という祈りを献げていましたが、今日からは、先ず一人の子どもをお送りください！という祈りをします」と言われました。神様は本当に不思議なことをなされるお方です。一人の教師の祈りに倍の恵みを与えてくださり、2名の子ども（小学3年と6歳）をCSの礼拝に送られました。このことを通して、教会学校の未来に光り輝く希望を見出すことができました。

●年間の行事

教会学校では、春と秋に「ワイワイお楽しみデー」（子どもからお年寄りまで参加できる集会）を行います。6月の「花の日」には、会津若松駅、駅前交番、消防署へ訪問し、7月は、

「夏期デー・キャンプ」を行い、12月の「子どもクリスマス」では、Ⅰ部はローソクによる燭火礼拝、Ⅱ部はクリスマス祝会です。

●子ども伝道への新たな試み

教会学校の礼拝は従来の礼拝形式ですが、特別集会では、視聴覚を多く取り入れたお話や、大きな動きのあるゲーム、野外での活動など色々と試行錯誤しながら子どもたちへの伝道に一生懸命取り組んでいます。

今年の11月に初めての試みで行われた「わくわく土ようび！」も今後続けて行きたいと願っています。また何か良い企画があればお教えください。
(今田好二)

●夏期デー・キャンプ

毎年、夏に行うこのキャンプは、日曜日午後からの半日で行っています。昨年までは、教会内で行っていましたが、今年は会津若松から西へ約15km程の所にある会津美里町の山を切り開いて作られた「ランブリングの郷」で行いました。参加者は、子ども1名(小学4年)と教会学校の教師6名、それに教会員3名の協力を得て、施設内の散策、ゲームやハート

タイム(聖書のお話し)などの活動を行い、夕食はバーベキューをして会津の新鮮な野菜を食べながら楽しい交わりができました。最後に、近くにある温泉にひたつて、身も心もさっぱりして帰って来ました。今年のキャンプのテーマは「ホンモノの愛と救い」で、牧師からメッセージが語られ、分級の時を持って神様の愛にふれることができました。恵みの多い素晴らしいキャンプができて、とても感謝でした。

(大関みさ子)

●わくわく土ようび！

昨年の秋に初めて開催された子どもの集会です。この数ヶ月、毎日曜朝に行われているJOYふる礼拝(CS礼拝)に、スポーツクラブの為休みがちになっている生徒が何人かのお友達と土曜の午後によく教会周辺で遊んでいる様子を牧師が見守っていて、土曜のその時間帯に子どもが集まりが出来ないだろうかとCS教師会で提案され、今回試験的に開催されました。時間は午後2時～3時まで。プログラムは、①はじめの挨拶。②ゲーム(題しておやつ争奪戦)。「五文字ひら



小さな綱引き(夏期デーキャンプ)

がなビンゴ」。

③ミニボーリング大会（題してラーメン杯^{カップ}）。子どもの遊び用プラスチック製のボーリングセットを使用。足を疊んだ状態のテーブルを縦に二つ長く並べて、2レーン^{レーン}をセッティング。ピンもボールも軽いせい^{せい}かあちこちへ転がって楽しく、とても盛り上がりました。

④紙芝居+メッセージ。CSスタッフで折り紙指導もしてくださる婦人のオリジナル紙芝居「放蕩息子」とショートメッセージ。

⑤表彰式。ゲームで1〜3位になったお友達に値段別のポテチ、ミニボーリングで1〜3位にはランク別のカップラーメンが授与されました。そして、参加賞としてチョコボールが皆に一箱ずつ配られました。予定の3時を過ぎましたが、残れるお友達とティータイム。子ども達は終わってもすぐには帰らず、教会にある遊び道具で楽しく遊んでいました。久しぶりに、子ども達の笑い声、はしゃぐ声が教会に響いて、とても祝された集会となり主に感謝しました。

（高橋なおみ）



いざ！ 五文字ビンゴ（わくわく土ようび）

●ワイワイお楽しみデー

子どもたちへの伝道のために、毎年、春と秋に開催しています。昨年までは「ワイワイ子どもお楽しみデー」という名称でしたが、今年度から、教会員や求道者の大人の^{ひとたち}も気兼ねなく参加できるようにという配慮から、「ワイワイお楽しみデー」に変更しました。昨年の秋は、11月24日（日）



ほく、優勝したよ！（ワイワイお楽しみデー）

午後0時30分から3時30分までの予定で開催しました。プログラムは、①開会の集い（さんび、祈り）、②ランチタイム（カップラーメン、ご飯、のり、梅干、ツナなどを用意）、③ゲームタイム（じゃんけんゲーム、割りばしを使ったビー玉リレー）、④みことばタイム（DVD鑑賞「たいせつなきみ」、その後、今田好一牧師によるお話し）、⑤終わりの集い（お菓子のすくい取り、誰もが最も真剣になる瞬間、集会案内、記念撮影）。参加者は、子ども3名、教師他大人14名。子ども3名の内2名は、11月9日の「わくわく土ようび」に導かれ、日曜日のJoyふる礼拝にも出席するようになった兄弟での参加でした。参加した子どもの数は少数でしたが、幼児から高齢の方に至る参加があり、幸いな集いとなりました。

（兼子匡司）

おわりに

『牧羊者』二〇一四年度第一巻をお届けできますことを感謝します。また、執筆者のご労苦に感謝いたします。今回の教師養成講座は、「あなたの子ども、あなたが教えてください」と題して、韓国シエマ教育セミナーの報告を掲載しました。「牧羊ひろば」は、待望教会のCSを紹介していただきました。今号の執筆者、奉仕者を紹介いたします。

『牧羊者』のご購読・ご利用について

* 分級用に、ワークA(幼稚園向け)、B(主に小学生1~3年生向け)、C(主に小学生4~6年生向け)を用意しています。また、付録として「子ども聖書日課」、「フラッシュカード」、「み言葉カード」、「中高科へのヒント」があります。いずれも、下記ホームページから無料でダウンロードできます。送付ご希望の方には、ワークは各600円+税でお送りします。
信徒局 教会教育室 ホームページ
<http://cs.jccj.info/>

* ご注文は、日本イエス・キリスト教団(事務局)まで。申込み、部数変更等のための用紙も、上記ホームページからダウンロードできます。
神戸市兵庫区塚本通3-3-19
電話 (078) 575-5511
FAX (078) 575-6611

聖書講解	高橋頼男師	金井信生師	石田高保師
研究資料	福井文彦師	金井由嗣師	小平徳行師
メッセージ例	宮澤清志師	井上義実師	和田治師
	中島啓一師	水野晶子師	
	松浦みち子師		
ワーク(A)	飯田勝彦師		
	鎌野幸師	吉田美穂師	野勢かほる師
(B)	勝田幸恵師	山下大喜師	
(C)	上森恭子師	田中裕明師	
中高科へのヒント	石田高保師	後藤健一師	
子ども聖書日課	田中愛子師	小野淳子師	金田ゆり師
フラッシュカード	丹羽遥姉	松浦あん姉	
	佐藤由香姉	金田ゆり師	
み言葉カード	丹羽遥姉		
イラスト			
ワークA打ち込み	多田豊子師		
校	長田栄一師	加藤清師	山田和幸師
正	中島啓一師		
また、事務作業・発送の教団事務所の兄姉、印刷の松木共栄印刷、菱三印刷に心から感謝いたします。(中島啓一)			

聖書教育教案誌 牧羊者 二〇一四年度 I巻

二〇一四年四月一日発行

発行所 日本イエス・キリスト教団 信徒局 教会教育室
企画監修 日本イエス・キリスト教団 信徒局 教会教育室

印刷所 菱三印刷株式会社
電話 (078) 575-5511
FAX (078) 575-6611
* 日本聖書協会「口語訳聖書」使用許諾済み